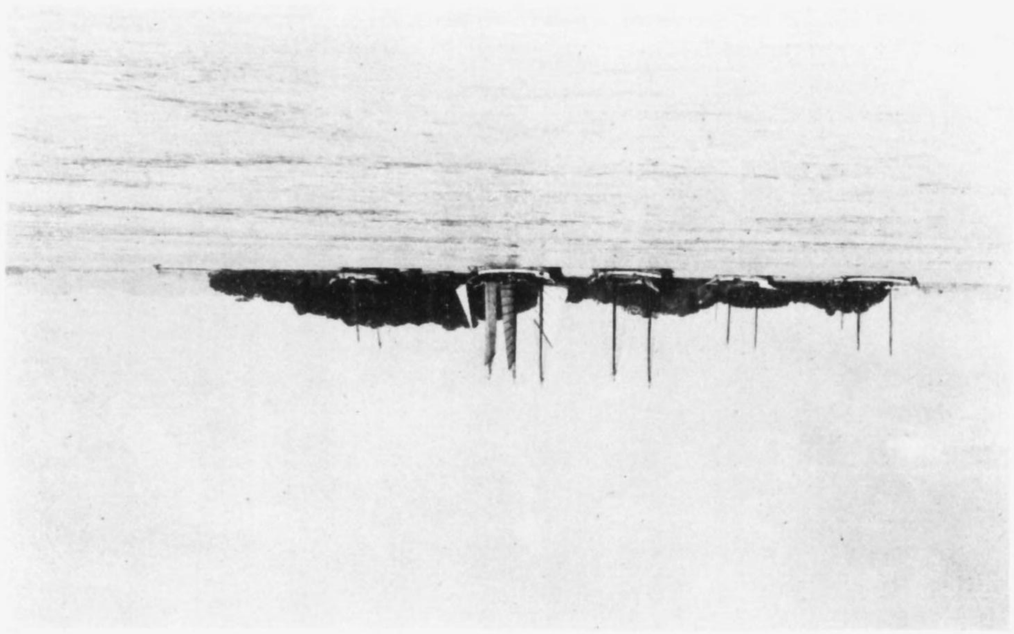
W261
582

增訂高島考

始

特261
582

增訂高島考



增訂高島考

水原岩太郎著

我　皇祖　神武天皇御東征ノ砌、吉備國高島宮ニ御駐蹕遊バサレシ事ハ古事記、日本書紀等ノ古書ニ明記セラレアリ此ノ高島行宮ノ遺蹟ニ就テハ傳說ノ地ガ多クアル、備後方面ニモ數ケ所アルガ吾人ハ其ノ地勢上ヨリ見テ備後ニテハ餘リニ西ニ偏スルト其ノ唱道セラル、說ノ執ル可キモノナキヲ以テ暫ク之ヲ除外スルモノデアル、我岡山縣下ニモ小田郡神島外村ノ高島、兒島郡本莊村ノ高島、同郡甲浦村ノ高島、上道郡高島村ノ高島鼻等以上四ケ所ノ候補地ガ唱ヘラレテ居ル、吾人ハ多年ニ亘リ國文學、歷史學、考古學、民俗學等ノ各方面ヨリ之ヲ調査研究シテ就中、兒島郡甲浦村ニ屬スル兒島灣口ノ高島ヲ以テ最モ確實ナル遺蹟ト認ムルモノデアル本來各候補地ニ就テノ研究ヲ併セテ記述ス可キデアルガ事頗ル廣汎ニ亘リ短時日ノ能スル所ニアラザルヲ以テ爰ニハ取敢ヘズ自己ノ尤モ確實ナリト信ズル兒島郡甲浦村ノ高島ニ就テ其概略ヲ叙述スルモノデアル其ノ詳細ナルモノ幷ニ其他ノ候補地ニ關スルモノハ後日期ヲ得テ之ヲ記スル事アル可シ。

（一）地　勢

古事記ニ伊邪那岐、伊邪那美ノ二神、大八島國ヲ生ミ賜ヒ還リマシ、時ニ吉備ノ兒島ヲ生ミ賜フ又ノ名ヲ建日方別ト云フトアリ。

今ノ兒島郡ハ陸ニ續キテ半島トナレルモ元トハ瀨戸內海ニ橫ハリ東西十里ニ餘レル大島ナリシ事ハ明カデアル

其ノ東端ナル小串ノ岬角ト對岸ナル邑久郡幸島村ノ正木ノ岬トハ距離僅カニ拾餘町ニ過ギス其處ノ海峽ハ現在ト雖トモ潮流急速ナルガ往古邑久郡ノ西部ヨリ上道、御津、吉備、都窪、淺口等ノ縣南部ノ平地ノ大部分ガ海ナリシ時代所謂吉備ノ穴海ノ廣

大ナリシ時ニ於テハ此ノ小串ノ海峡ハ其形勢恰モ阿波ノ鳴門海峡ニ彷彿タルモノアリ而カモ其幅彼レヨリ狭キモノナレバ其ノ潮流ノ急激ナリシ事ハ想像ニ餘リアル所デアル古事記ニ所謂、速吸門トハ乃タ此ノ海峡ノ事ナルヲ知ル可キデアル後世此ノ海峡ヲ吉備ノ大門トモ呼ンデ居ル。

平賀元義ノ歌ニ左ノ如キモノガアル。

大海原汐みち來れば籠崎の大門ゆ入來る八十の大船

本繁き吉備の大門に夕星のかゆきかく行く舟のつり舟

此ノ海狭ハ是ヨリ以西ノ所謂吉備の穴海ト是ヨリ以東ノ外海、播磨灘方面トノ關門ナルガ故ニ航海ノ船舶ハ必ズ一旦此所ニ船繋リシテ潮流ヲ待合セ天候風波等ヲ見合ス可キ必要アリシモノデアル。

故ニ　神武天皇ノ御船隊ガ西ヨリ進行シ來リ賜フニ際シテハ例令何レノ地ニ御停泊アリシトスルモ必ズ又タ此處ニテハ一時御繋泊遊バサレテ天候風波等ヲ見定メラル可キモノデアル。

此ノ小串ノ海峡ト尤モ近距離ニアル甲浦村ノ高島ハ　神武天皇御駐輦遊バサレ其ノ兵備萬端ヲ完整アラセラレテ天候風波ヲ見極メ賜ヒ一旦此ノ海峡ヲ出テマシテ直チニ播磨灘ヲ突進シ大阪灣ニ達セラルヽニ尤モ適當ノ地点デアル日本書紀ニ所謂一舉シテ天下ヲ平ゲント欲スル也トアルニ尤モ適合セル地点ト云フ可キデアル。

大日本地名辭書ニモ「當時藤戸の航道に通じ船艦兒島灣を經由して東征したりと想はるれば此地の形勢最も機宜に合ふ」ト云フテ居ル吉田東伍博士ノ斯ノ說ハ尤モ正シキ見方デアル故ニ吾人ハ地勢上ヨリ見テモ各候補地中此地ヲ尤モ優レルモノト斷定スルモノデアル。

（二）高島ノ遺蹟遺物

高島ハ兒島灣中ノ孤島ニシテ南北六七町計リ周圍拾餘町アリ三ツノ山ト其東及ビ南ノ低地トヨリ成リ東低地ノ前ハ遠淺ノ海面

デアル。

此島ハ一ニ竹島トモ呼ハレテ居ル近年迄ハ島ノ過半ニ竹林生茂リ白鷺ナト群棲シテ居タモノデアルガ今ハ岡山市管轄ニ屬シ開拓セラレテ遊園地トナレリ土地ハ清淨ニシテ風光明媚古クヨリ世ニ知ラレテ古歌モ多クアリ萬葉ノ頃ヨリ名勝トシテ歌枕トナレルモノデアル又タ備前八景ノ一トシテ詩歌モアリ諸人多ク遊覽セシ處デアル就中古歌數首ヲ摘記セン。

萬葉集、七、羇旅歌

竹島乃阿戸白波者動友吾家思五百入鉾染

夢のみにつぎて見えつゝ高島の磯起す浪のしく〳〵思はゆ

御集　後鳥羽院御製

竹島の波のよるかとみゆるまで垣根をこゑて咲る卯の花

名寄歌集　光俊

三年經しこや高島の宮柱ふとしきたてゝ後もよろづ代

右光俊ノ詠歌ハ　神武天皇御東征ノ砌此地ニ行宮ヲ置カレ賜ヒシ事ヲ尤モ明白ニ言ヒ表ハセシモノデアル

夫木集

小夜ふけて月たけ島の影みればふしうき旅のねをのみぞ鳴　讀人しらず

竹島のあとしら波のたちかへり磯もとゆすり鳴千鳥かな　公相

竹島によするさゞ波幾返りつれなきよゝをかけて戀らん　爲家

海士のたく煙の末や竹島の名に立初て代々を經ぬらん　爲相

代々を經てをのがねぐらの竹島にふしなれて鳴うぐゐすのこゑ　雅定

懷中抄

古へはかくやは聞し竹島のふしをへだて、今ぞさゆなら

又タ萬葉調ノ歌人平賀元義ノ歌集ノ内ニ左ノ如キモノガアル。

弘化三年後の五月の廿日より四日の日岡島ぬしの高樓に遊びて作る歌并に短歌（小串村大字阿津ノ岡島氏ノ家ナリ）

吾戀ふる兒島の國に家はしも滿てあれどもよき人の家と造れる磯の上のこれの高屋に此夕吾しのぼりて海見れば、ゆたけく廣く、天看れば遙けく高し千早振、神の島は磯近く神さび立都、名ぐはし、高島山は海の上に神さびいます久方の天の金山、妹がきる、笠目の山は雲居にぞ遠く見えけるよせて來て、こゝに遊ばへ風流士のとも

大海原、汐みち來れば籠崎の大門の入來る八十の大船

ある人の家にて（小串ノ板根鼻山の家ナリ）

千早振神の高根をとこしへに見るこの宿は萬代にもか

△小田郡ノ高島ニモ古歌ヲ引用スル人モアルガ寛永頃ノ岡山藩ノ地圖ニハ鳩島トアリテ高島ノ名ハ見ヘヌノデアル是ヲ以テセバ萬葉ノ頃ニ小田郡ニ高島ノ名稱アリシ哉凝ハシキモノデアル。

此ノ高島ヲ一ニ竹島トモ云フガ竹島ト書イテ「タカシマ」ト讀ム事ハ萬葉頃ノ和歌ニテモ知ラレルノデアル、ツマリ高島ト書クモ竹島ト書クモ共ニ「タカシマ」ト讀ム可キモノデアル之ヲ竹島ト稱スルノハ後世ノ事デアリ唯文字ニ拘泥シテ古訓ヲ知ラズ且ツ後世、此ノ島ニ竹ノ叢生セシ事アル等ニヨリテ「タケ」島トモ俗稱セラレシモノデアロウ。

備前藩ヨリノ告示ヲ載セテ居ル其文左ノ如シ。

高島ハ往古ヨリ竹島、高島、兩樣ニ唱來候得共向復高島ト唱申スベキ旨正德四年二月仰出サル、トアリ。

天孫瓊々杵尊ノ天降リマシ、處ヲ日向ノ襲ノ高千穗ノ添山ノ峯ト呼ビ其ノ遊行ノ時、吾田ノ笠狹ノ御碕ニ到リマシ遂ニ長屋之竹島ニ登リマス此處ニテ木華開耶姫ノ命ニ遇ヒ賜フタノデアル此ノ長屋ノ竹島モ竹ト書ヒテ「タカ」ト讀ンデアル。

此ノ高島ハ海中ノ一孤島デハアルガ是レ丈ケノ面積ガアレバ　神武天皇御東征ノ砌　行宮ヲ營ミ賜フニハ事足ル可ク決シテ狹

小ヲ感ズル事ハナイモノデアル。

南ノ山上ニ柱狀ノ巨巖立テルアリ周圍ハ約二十尺餘モアリ恰モ倒ルガ如ク垂直ニシテ其高サハ約七八尺計リアリ上面ハ稍ヤ平坦デアル此ノ柱狀ノ岩ヲ中心トシテ其廻ハリニ大サ、三四尺乃至五六尺位ノ幾個ノ岩アリテ低ク相并列シ略ホ圓形ヲ成セルモノアリ其狀恰モ祭壇ト稱スルニ適シテ居ル。

此ノ周廻セル環狀ノ岩ハ一見天然ノ如ク見ユルモ精査スレバ其一部ニハ人爲ノ跡アルガ如シ然シナガラ二千六百年ノ悠久ノ歲月ヲ經タルモノナレバ殆ンド天然ノ如ク成リテ今ハ容易ニ天然カ人工ノ物カヲ見分ケ難キ程デアル。

此物ニシテ幾分ニテモ人工ノ加ヘラレシモノナル以上乃チ以テ　神武天皇此地ニ御行在アラセシ砌リ天神地祇ヲ祭リ賜ヒシ祭壇ノ遺蹟ト認ム可キモノデアル。

若シ又タ此ノ石籬ニシテ天然ノ儘ナリトスルモ　天皇此地ニ御駐輦ノ際ニハ必ズ之ヲ祭壇ニ御用ヒ遊ハサレシ事ハ想像ニ餘リアル所デアル　天皇ノ御行在アラセシ此島ニ斯ノ如キ天然ノ祭壇アリシトセバ實ニ以テ此上ナキ尊キ奇蹟ト言ハザルヲ得ンノデアル。

大和御平定ノ直後ニ疇ヲ鳥見山ニ立テ、　皇祖天神ヲ祭ラセ賜ヒシ事ニ因リテ見ルモ祭壇ハ多ク山上ニ設ケラルヽ事ヲ知ル可キデアル此ノ環狀ノ石籬ハ此島ノ南ノ山上ニ在リテ祭壇トシテ尤モ適當ノ位置デアル。

此ノ高島行宮ハ此處ニテ兵備ヲ完整遊バサレ大和ヲ平定シ賜ヒシモノニシテ乃チ我大日本建國ノ策源地タリシモノナレバ此處ニ於テ天神地祇ヲ祭リ建國ノ御宏圖ノ完成ヲ祈リ賜ヒシ事アルハ論ズル迄モナイ所デアロウ。

此岩ハ明應四年ノ古記ニ見ルモ平安朝ノ頃ヨリ　神武天皇ノ御靈ヲ鎭祭シテ地主ノ神トナシ且ツ百座ノ法施ヲ修メラレシ所ニシテ爾來今ニ至ル迄世々之ヲ崇敬シ現時モ猶ホ岩武明神又ハ岩武權現トモ稱シテ崇祀シテ居ルノデアル此ノ岩武明神ナル名稱モ乃チ　神武天皇ノ御諱　神日本磐余彦尊ニ因メルモノナル事明ラケシ　弘化頃歌人ニシテ又タ考證家タル平賀元義此地ニ遊ビテ詠ゼシ歌ノ内ニ左ノ如キモノガアル。

神佐備豆立流石社、石門別、神廼則御形成良女

是等ヲ以テ見ルモ此ノ環狀石籬ガ　神武天皇ノ御聖蹟タル事ヲ知ル可キデアロウ　此ノ南ノ山ノ北麓ニ古代ノ窯址ガ殘存シテ居ル此處ヨリハ灰土ニ混ジテ土師土器ノ高坏ノ破片ガ多ク發見セラレタノデアル故ヲ以テ此處ニテハ土師土器ヲ燒成セシ事ヲ知ル可キデアル其規模ハ餘リ大キクハナイ樣デアル此等ノ土器ノ年代ヲ考フルニ略ホ我建國頃ノモノナル事ヲ認メラレルノデアル

土師ノ名稱ハ　垂仁天皇ノ朝ニ　皇后ノ喪ニ當リテ野見宿禰ガ土偶ヲ造リテ奉リシニヨリ土師臣ノ姓ヲ賜ハリシトアルガ然シ其ノ以前ヨリ既ニ此種ノ土器ヲ製造セラレシ事ハ疑ヒナキモノデアル乃チ我建國ノ初ヨリ既ニ此種ノ土器ノ存在セシ事ハ實地ニ徵シテ明カナル所デアル

而シテ此處ニテ破片ヲ多ク發見セラレシ高坏ハ卽チ是レガ主トシテ祭祀ニ用ヒラルヽ物ナル事ヲ知ル可キデアル

案ズルニ　神武天皇此地ニ御行在遊バサレシ砌リ天神地祇ヲ祭リ賜フ等ノ御用ノ爲メニ特ニ此島ニテ清淨ノ祭器ヲ燒成セシメラレシモノト思ハレルノデアル

彼ノ大和ニ於テ磯城ノ八十梟帥ヤ高尾張ノ邑ノ赤銅ノ八十梟帥等ヲ討伐セラレントスルニ當リ此ノ高島行宮ニ御駐輦ノ頃ヨリ臣從シ奉リシ椎根津彥ト大和ニシテ歸順セシ弟猾トノ二人ヲシテ天ノ香山ノ埴ヲ取リ歸ラシメ天ノ八十平瓮ヲ造リテ天社國社ノ神ヲ祭リ勝利ヲ祈リ賜ヒシ事アリシニ徵シテ見ルモ此地ハ天下ヲ平定シ賜フ可キ御宏圖ノ策源地デアリ着々兵備ヲ充實セラレツヽアル際ナレバ必ズヤ此處ニテモ清淨ノ祭器ヲ造リテ天神地祇ヲ祭リ賜ヒシ事ハ疑フ可カラザル所デアロウ。前述ノ環狀石籬ト兩々相待ツテ尤モ有力ナル　行宮址ノ證據タル可キモノデアル又タ大正年間ニ此島內ナル高島神社ノ附近ニ井ヲ穿チシ際ニ地下數尺ノ處ヨリ土師土器ノ壺ヲ發見セラレテ居ル、口邊ガ少シ破損シテ居ルガ現存セル高サ三寸八分胴徑四寸八分アル無文デハアルガ製作ハ頗ル精良ノモノデアル此ノ土器モ同ジク建國頃ノ物タルヲ認メラレルノデアル。案ズルニ是レ亦タ此地ニ御駐輦ノ頃御使用アリシ遺物ト見做ス可キモノデアル

又タ先年此ノ高島附近ノ海中ヨリ彌生式土器ヲ發見セラレシ事アリ又タ嚴甕ヲモ發見セラレテ居ル。尙ホ今ニ此ノ島中ヲ逍遙スレバ古代ノ石器、彌生式土器、嚴甕、土師土器等ノ破片ヲ散見スル事ガアル此等ハ必ズシモ　行宮當時ノモノトハ限ラナイガ此島附近ニ古代ノ遺物往々殘存スルモノアル事ヲ知ル可キデアロウ。

△彼ノ小田郡高島ニ發見セラルヽ糸數ノアル小形ノ茶碗樣ノ土器ハ吾人ノ田井浦乙式土器ト稱スルモノニシテ兒島郡宇野町大字田井字田井ノ浦ノ窯址ヤ、邑久郡長濱村字奧浦ノ窯址等ニ同樣ノモノガ多ク存在シ且ツ是レト同種ニシテ小異アル物乃チ吾人ノ師樂式土器ト稱スルモノハ邑久郡、兒島郡ノ各地及ビ香川縣管下ノ直島、與島、塩飽島等ノ諸列島ニテモ多ク發見セラルヽモノデアリ其ノ總テガ日用ノ雜器ニシテ且ツ其ノ年代モ建國頃ヨリハ大分降レルモノデアリ又タ其ニ混ジテ發見セラレアル土製ノ網錘モ勿論漁夫ノ用具デアリ共ニ下民ノ用品タル可ク頗底高貴ノ御用品ニアラザル事ハ明ラカデアル其等ノ品ト此ノ甲浦村高島發見ノ高坏トハ格段ノ差違アルモノデアル。

△又タ小田郡ノ高島ニテハ往年發見セラレシ嚴甕ヲモ行宮當時ニ關係アル物ノ如ク說キシ人アリシモ是等ハ皆古墳ヨリ發見セラレシモノニシテ其地ニ多ク殘存セル古墳ハ又タ建國頃ヨリハ大分年代ノ降リシモノナルガ故ニ此等ノ嚴甕モ到底高島行宮當時ノ資料ヲ凝ス可キモノニハアラズ。

前記ノ如ク瀨戸內海ノ沿岸各地及ビ島々ニハ古代ニ土器ヲ造リシモノナルニ獨リ此ノ高島ニノミ主トシテ祭祀用ノ高坏ヲ燒成セラレアル事ハ特ニ注意ス可キ事柄デアル

中央ノ山ニ天宮山ト云フ名稱ガ殘ツテ居ル案ズルニ此ノ山上コソ行宮ヲ營ミ賜ヒシ地点ト想像スルノデアル天宮山トハ乃チ天ノ宮山ト稱セシモノナランカ島ノ中央ニ位シ行宮ヲ設ケラルヽニ尤モ適當ノ地点デアル。

又此島ニ井戸アリテ頗ル淸良ノ水ガ湧出スルノデアル而シテ如何ナル旱天打續クトモ水ノ絕ユル事ハナイノデアル此ノ井水ハ島ノ人々ガ飲用トスルノミデナク對岸ナル上道郡沖田村ノ住民等モ皆陸地ヨリ態々舟ニテ此島ニ渡リ來リ此ノ淸水ヲ汲ミ歸リテ日常ノ飲用ニ供シテ居ルノデアル以テ其水量ノ豐富ナル事ヲ知ル可キデアロウ。然ルガ故ニ往昔此島ニ　行宮ヲ置カレ賜ヒ

シ際ニモ御一行ノ人々ノ御用ノ水ニ供シテ充分餘リアリシ事ヲ知ル可キデアル此海中ノ孤島ニシテ　行宮ヲ置カレシ處ニ斯ノ如ク天然ノ良水ガ豐富ニ湧出シアリシ事ハ是レ亦タ一ツノ奇蹟トモ見做ス可キモノデハアルマイカ。

△彼ノ小田郡高島ノ山腹岩ノ間ニ些爾タル水ノ出ツルアリテ其廣サ一尺計リ深サ四五寸計リノ溜リ水ヲ神水ト稱シツヽアルモノトハ正ニ雲泥ノ差違アル事ヲ知ル可キデアロウ。

此島ニモ古墳ト思ハルヽモノヨリ先年種々ノ古代遺物ヲ發見セラレテ居ル現ニ島ニ在住セラルヽ嵐基一郎氏ガ此ノ發見品ノ幾分ヲ持ツテ居ラレルノデアル。

其内ニ平板形ノ曲玉ト柳葉狀ノ玉ト平圓形ノ玉、小臼玉等ガアル是等ハ皆蛇紋岩ヲ以テ造ラレテイルノデアル。

曲玉ナルモノハ通常丸クシテ曲レルモノナルガ此處ニテ發見セラレシモノハ夫レガ平板形ニ造ラレテ曲ガツテ居ルノデアル斯ノ如キ形ノ曲玉ハ極メテ存在ノ稀ナルモノデアル。

又タ柳葉狀ノ玉モ平板形ニ造ラレテ居ル而シテ此物ハ垂直デ曲ツテハ居ナイガ矢張リ其ノ一方ニ小孔ヲ明ケテアリ、スベテノ製作ガ曲玉ト同ジ事デアル故ニ吾人ハ之ヲシモ曲ラザル曲玉トデモ謂ヒタイ程デアル之レハ魚牌トモ云ハレテ居ル此種モ亦タ存在ノ稀少ナルモノデアル。

又タ平圓形ノ玉ハ大小アリテ其大ナルモノハ平面ニ二個ノ小孔ヲ明ケ、小ナルモノハ一個ノ小孔ヲ明ケテアル恰モ現今ノ「シヤツ」ノ「ボタン」ト同ジ形狀ヲシテ居ル此種モ亦タ存在稀少ノモノデアル。

吾人ノ淺見ヲ以テハ我地方ニ於テハ平圓形ノ玉ヲ少シ許リ見聞セシ事アルト小臼玉ハ往々散見スルノデアルガ其他ノ二種ノ平板形ノ曲玉ト柳葉狀ノ魚牌ト稱セラルヽ物トハ未ダ其ノ發見ノ例ヲ知ラナイノデアル。

是等ノ玉類ハ其原石モ餘リ上等ノモノデナク又タ其製作モ古樸デアル其ノ年代ヲ案ズルニ古墳トシテモ尤モ古キ部ニ屬シ我建國頃ニ近キモノト思ハレルノデアル尙ホ共ニ發見セラレシモノニ瑪瑙製ノ曲玉、管玉モアリ又タ嚴甕ヤ土師土器モ數点アル

元來高島行宮ノ遺蹟トシテハ古墳ノナキ事ガ尤モ望マシイノデアルガ傳ヘラルヽ各候補地ニハ皆何レモ古墳ノ存在セシ形跡ガ

アル凡ソ古代ニ墳墓ヲ築造スルニハ眺望ノ善キ地点ヲ撰ム風習アルガ故ニ　行宮ヲ造ラレシト云ハル、程ノ地点ニ於テハ必ズ古墳存在セシ事ヲ否ム可カラザルモノヽ如シ但シ他ノ傳說地ニアル古墳ハ或ハ其位置ヨリ見テ又ハ其ノ遺物ヨリ見テ何レモ我建國頃ヨリハ年代ノ降レルモノノミナルヲ知ル可キデアル獨リ此ノ高島ノ古墳カト思ハルヽモノハ其遺物ニ依リテ殆ンド行宮當時頃ノモノト思ハルヽ事ヲ注意ス可キデアル。

案ズルニ三年若クハ八年ノ御駐輦アリシ間ニハ御一行ノ中ニ死去セラレシ人モアリシナラン故ニ其人共ノ遺骸ヲ此處ニ埋葬セラレシ哉モ知レナイノデアル。

又案ズルニ此處ヨリハ人骨ヲ發見セラレザリシト其發見品モ他ノ古墳ノ發見品ニ比シテ幾分差違アルヲ以テ見レバ或ハ之レハ古墳ニハアラズシテ他ノ何等カノ理由ニヨリテ埋藏セラレシモノナル哉モ知レヌ、今其理由ヲ推察スレバ或ハ　行宮御造營ニ當リ地鎭ノ爲メニ是等ノ品ヲ埋藏セラレシニハアラズ哉ト思ハレルヽノデアル。

△小田郡高島ニモ多クノ古墳ノ跡アリ何レヲ見ルモ古墳ノ中期頃ノモノト思ハレ決シテ二千年以前迄モ遡リ得ヌモノデアル此等ノ古墳ヨリ發見セラレシ土器ヲ往年　神武天皇當時ノ祭器ト稱シテ多數參拜セシ事アリシト聞クガ是等ハ寧ロ滑稽トモ謂フ可キモノデアロウ。

△上道郡高島村ノ高島鼻ニモ古墳ノアリシ事ガ知レル此地ハ龍口山ノ麓ニ位スル小丘ニシテ其位置ヨリ見テ又其附近ノ古墳群ノ配置ヨリ見ルモ此ノ地点ニアリシ古墳ハ又タ中期以後ノモノタル可シ其處ニ元ト古墳ノ石郭ニ用ヒアリシト見ラル幾個カノ石ガ存在セルヲ今ハ之レヲ祭壇風ニ改造セラレアルハ又タ笑止ノ事デアル

△兒島郡本莊村ノ高島ニモ頂上ニテ行宮址ニ擬セラルヽ所ニ古墳ノアリシ事ヲ知ル可ク今ニ其處ヲ高塚ト呼ンデイル其下方ニモ二三ノ古墳石郭ノ跡アリ是等モ其遺物等ヨリ見テ二千年以上ニハ遡リ得ヌモノデアル

△近頃我岡山縣下ニ規模優大ナル古墳ノ多數存在スルノヲ見テ　神武天皇ノ高島行宮ノ御駐輦ハ數代ノ長キニ亘ルモノデアロウトノ說ヲナス者アリシト聞クガ彼ノ徒ラハ古墳ノ時代觀ノ出來ナイモノデアツテ其說ノ妄誕ナル寧ロ噴飯ニ値ス

ルモノデアル

此島ニハ高島神社ガ鎮座マシマシテアル此ノ神社ハ社記ニヨレバ　光仁天皇ノ御宇寶亀年間ニ天下大旱ス時ニ備前ノ國司藤原朝臣眞葛ガ此處ニテ雨ヲ祈リ其祖神タル春日ノ神ヲ奉祀ストアル。

然シナガラ此ノ高島神社ハ其實春日ノ四柱ノ神ト　神武天皇ト都合五柱ノ神ヲ相殿ニ祭ラレテアル案ズルニ此地ハ　神武天皇ノ高島行宮ノ御遺蹟ナレバ　神武天皇ヲ奉祀シアリシ所ヘ藤原ノ眞葛ガ其ノ祖神ヲ合祀セシモノト思ハレルノデアル此事タルヤ乃チ彼レ藤原氏一族ノ常套手段トモ謂フ可キモノデアル。

何トナレバ彼ノ藤原氏ハ大織冠鎌足公ノ精忠無比ノ大切ニヨリテ其子孫朝廷ニ大勢力ヲ占ムルニ至ルヤ勉メテ皇室トノ婚姻ヲ重ネ、尚ホ其他ノ手段ニモヨリテ　皇室ト藤氏トノ間柄ヲ密接ニシ極メテ之ヲ紛ラハシキモノト爲シテ、遂ニハ両者一体タラシメント企圖セシモノデアル。之ヲ察シテ防ガント努力セシ人ニ、前ニ吉備眞備公ガアリ、後ニ菅原道眞公ガアル藤氏一族ハ此ノ二大偉人ヲ邪間物トシテ自己一族ノ勢力ニ據リテ遂ニ之ヲ壓倒シタモノデアル。是ハ單ナル吾人ノ憶說デハナイ一般史家ノ定論デアル。

斯ノ寶龜年間ハ中央ニ在リテハ吉備公ガ失意ノ境ニ逆轉シ藤原百川等ノ一派ガ勢力ヲ張ツテ居タ時デアル、此時ノ備前ノ國司モ則チ鎌足公四世ノ孫ト云ハル、藤原朝臣眞葛デアル故ニ爰ニモ藤氏一族ノ野望ニ合致シテ　皇祖神武天皇ノ御聖蹟ヘ己ガ祖先ノ春日ノ神ヲ合祀セシ事ガ察セラレルノデアル其ノ配下ナル記錄史共ハ藤氏ノ權勢ニ迎合シテ春日ノ神ヲ主体トシテ傳ヘシモノト思ハレル。

中古ニ於テハ御祭神ニ關スル文献ヲ見出シ得ヌノデアルガ吉備濫故秘錄ニヨレバ貞享元年神官共ノ爭論アリテ時ノ寺社奉行能勢少右衛門ガ御内陣ヲ開イテ見分セシニ左ノ書付ガアリシトノ事デアル。

干時寛永十七年　　施主　厚村喜右衛門

奉造立五社大明神御體　　本願主　宥算上人

霜月吉日　　佛師　又右衛門

同書ニハ此時佛躰五ツアリシト書イテアルガ之レハ本願主ガ僧侶デアリ作者ガ佛師トアルニヨリ見分ノ者等ガ佛躰ナリト誤認セシモノデアツテ、事實ハ正シク五柱ノ御神像デアル、此ノ御神像コソハ正シク　神武天皇乃チ神倭磐余彦尊ト天兒屋根命、武甕槌命、經津主命、比咩神ノ五柱デアリマス。

例令大願主ガ僧侶デアリ作者ガ佛師デアロウトモ明カニ五社大明神ト記載シアル以上之レガ御神像デアル事ハ間違ナキ所デアロウ。

畏多クモ此ノ五柱ノ御神像ヲ拜見シ奉リシニ、其製作年代ハ記載シアル如ク寛永年間ノモノニ相違ナイガ其ノ樣式ハ古ルイノデアル、案ズルニ平安朝頃ノ樣式ヲ摸セシモノト思ハレル、之ヲ推考スルニ此ノ神社ニハ元ト古代ノ御神像アリシモノガ甚シク破損シタル爲メニ寛永十七年ニ之ヲ改造シ奉リシモノナル可シ、而シテ其際勉メテ古キ御神像ノ樣式ヲ模倣シテ作ラレシモノト思ハレル。

斯カル場合多クノ例ハ破損セル古キ御神像ヲ其儘内陣ニ置キ奉ル事ハ稀ニシテ或ハ之ヲ天井ニ納メ或ハ之ヲ床下ニ納メ又時ニハ之ヲ土中ニ埋藏シ又ハ之ヲ燒却スル事モアル此地ノ如キ島ニ在リテハ或ハ之ヲ海中ヘ流シ奉リシ例モアル樣デアル、斯クシテ古キ御神像ノ存在セザルモノガ大部分デアル故ニ此ノ神社ニモ何等カノ方法ニヨリテ遺憾ナガラ古キ御神像ハ存在セザルモノト見ル可キデアル、而シテ現ニイマス御神像ガ古像ヲ摸セシ風アルヲ以テ見レバ元ト此ノ神社ニ古代ノ御神像アリシ事ヲ察知ス可キデアル。

然シ今ハ其等ノ實際ヲ見ル可キ便ハナイノデアルガ、寛永十七年ノ作トアレバ約三百年ノ以前ヨリ此ノ五柱ノ神ハ此社ニ奉祀シアリシハ明カデアル其内ノ御一柱ハ乃チ　神武天皇デアル此ノ御神像ガ既ニ三百年間儼然トシテ此社ニ御座遊ハサルヽト云フ事ニ徵シテモ此ノ高島ガ　御行宮ノ遺蹟タル事ヲ知ル可キモノデアロウ。

尚ホ又タ吉備濫故秘錄ニ依レバ吉田家ノ折紙ニモ　神武天皇幸ニ吉備國部高島宮ニ云々トアリト云ヘリ之ヲ以テ見レバ神道管領

タル吉田家ニモ此ノ所ガ　神武天皇ノ御聖蹟タル事ヲ認メテ居ルノデアル。

此ノ高島神社ハ延喜式神名帳ニアル兒島郡田土ノ浦座神社デアル事ガ知レタノデアル。此ノ田土浦座神社ハ近年ニハ下津井町大字田ノ浦ニイマス神社ガ夫レデアルトノ説モアルガ、吾人ノ同地ニ就テ調査セシ所ニテハ同社ノ石ノ手水鉢ニ、奉納文化十年酉四月吉日、田土之浦、中口屋德右衛門、ト刻セルモノガアリ。其頃ニ田ノ浦ノ地名ガ田土ノ浦ト云フニ似テイル所ヨリ此ノ如キ説ガ出來タモノデアル。其ノ以前ニハ同社ガ田土ノ浦座神社デアルト云フ事ヲ證明ス可キ何等ノ根據ハナイ樣デアル。又タ近年粒江村ニモ名前ノ似テイル田樋神社ト云フノガアツテ、夫レヲ式内社ナラント云フ説モアルガ之モ何等ノ證據ハナク又タ其邊ニ田土ノ浦ト云地名モナイ樣デアル。

而シテ事實田土ノ浦ト稱スル所ハ、兒島郡ノ北岸ナル小串村ノ小串及ビ阿津ト、甲浦村大字宮浦ニ亘ル一帶ノ地ノ名稱ナノデアル之レガ考證ヲ叙セン。

萬葉調ノ歌人ニシテ又タ考證家トシテ著名ナル平賀元義ノ歌ニ次ノ如キモノガアル。

三宅郷田土の浦より竹島を望みて

兒島の海田土の浦に神しくもかみさびいます竹島の神

又　タ

田土の浦漕出で見れば丈夫の、たけ雄島山浪の上に見ゆ

又タ歌人岡直廉氏ノ説ニ左ノ語アリ。

備前兒島郡ニモ竹島ト稱スル小島アリ　神武天皇ヲ祭レリ、コモ素ヨリ式ニ田土浦座神社トアル社ニテ備前國惣社ノ神名帳ニハ田土浦坐竹島神社トアリ云々。

室町期ニ於ケル備前國ノ神名帳ガ今三種傳ヘラレテ居ル其内明應四年十二月二十二日ノ記アル西大寺本ニハ

兒島郡九座ノ内　　從五位下　竹島の明神

トノミアリテ別ニ田土浦坐神社ハ記載シテナイノデアル。

又タ總社ノ神主綿抜藤太夫ガ家ニ傳ヘアリシヲ平賀元義ガ寫セシト云ハルゝ本ニハ、

兒　島　郡　　田土浦座神社（右在神祇官）

竹　島　神　社

ト二社共ニ載セテアル又タ其ノ別本ト稱スルモノニハ、

兒　島　郡　　田土浦坐　竹　島　神　社

ト一社ニ合セテ載セテアル三本各々小異ハアルガ綜合シテ見レバ延喜式神名帳ニアル田土ノ浦座神社ハ乃チ竹島神社ナル事ヲ知リ得ルノデアル。

此ノ高島ハ田土ノ浦ナル海岸ノ前ニ在ル小島ニシテ田土浦ニ附屬スルモノナルガ故ニ乃チ田土ノ浦ニ座ス竹島神社ト稱セラレシモノデアロウ。

事實此ノ高島神社ハ古ヨリ今ニ至ル迄、此ノ田土ノ浦ノ一帶ナル小串、阿津、宮浦及ビ甲浦村ノ内大字郡ノ一部トノ産土ノ神デアル。

郡ニ在ル總社ノ祠官難波氏ノ家ニ傳ハレル田使氏難波族系圖ヲ見ルニ左ノ如キ事ガ記載シテアル。

若狹守乃男　難波神主田使某　天正年中兒島郡三家ノ郷田土浦ニ坐ス竹島神社、勅願所八幡ノ新宮、兒島郡ノ總社、三社乃神主職也

若狹守乃孫　難波神主田使某　慶長年中　三社乃神主職也

之ヲ以テ見レバ古ク天正、慶長ノ頃ニモ田土ノ浦ニ座ス竹島神社ノ名アリシ事ヲ知ル可キデアル。

前記ノ寛永十七年ノ御神像ノ施主ハ厚村喜右衛門トアリ、大願主宥算上人ハ阿津村賣積院ノ住職デアル。阿津村ノ祠官小山氏ハ前記、郡村ノ祠官難波氏等ト共ニ此ノ高島神社ノ祠官タリシモノデアリ、小串、阿津、宮浦等ノ神子モ皆此ノ神社ニ奉仕シテ

居タモノデアル。

毎年祭禮ニハ高島神社ノ御神輿ハ船ニテ渡御アリ阿津村ノ明神鼻ト云フ所ヨリ上陸セラレ字岡ノ御神或ハ岡ノ御前ト稱スル所ニ奉祀シテ十五日間祭典ヲ行ヒシ事ガ舊記ニ見ヘル。

此ノ岡ノ御神ニハ或ハ遙拜ス可キ拜殿ガ造ラレアリシカト思ハレル（現ニ宮浦ニハ濱手ニ遙拜殿ガ建テ、アル）或ハ御分社ニ成ツテ居タカモ知レナイ又タ其所ニ　天皇ト云フ名モアリ其所ニテ祠官等ガ潔齋シテ居タトノ事モ記サレテアル。

又タ古キ記錄ニ小串村ノ内ニ「竹乃宮と申す假宮あり往昔高島神社此地に渡御成りて祭祀終り還御在しが右の假宮中古癈絶す」トアルガ今ハ小串ニ此ノ地点ガ明カデナイ古クハ小串村ト阿津村トハ一村ニナツテ居タ事モアル由（中古ハ二村ニ別レテ居タガ今ハ又タ一村ニ成ツテイル）故ニ此ノ竹乃宮ト云フノモ亦タ阿津ノ岡ノ御神ノ事ナラント思ハレル。

寛永九年六月ニ阿津村厚學山寶積院ノ僧宥海坊ナルモノ阿津村ニ八幡宮ヲ勸請シテ阿津ト小串トノ氏宮トナツタノデアルガ其後高島宮ハ宮浦ノ氏神デアリ阿津ト小串トハ大氏ト稱シタトノ事ナルガ尙ホ從前ノ通リ崇敬ハ變ラナイノデアル。

是ヨリ以後ノ祭禮ニハ高島宮ノ御神輿ト八幡宮ノ御神輿トガ一所ニ會シテ幷ビ祭典ヲ行ハレタノデアル。

其頃ノ祭禮ノ記錄ヲ見ルニ阿津ノ神官神子等ハ両社ヲ兼ネテ奉仕シ氏子中ヨリ家筋ニヨリテ當屋ト云フ者ヲ撰定シテ重キ務ヲナサシメ竹島明神ハ船渡御ニテ、ちつき籏拾貳本、御弓十肩、鐵炮十挺、御太刀、御長刀、朱蓋、太鼓ノ類ノミ、八幡宮ノ方ハ陸地ノ行粧ニテ御長柄十本、御弓十肩、鐵炮十挺、獅子、鼻長、おたふく面、御太刀、朱蓋、傘鋒、柳榊、御供かべりの女子等トアリ其祭儀ノ盛ンナリシヲ知ル可キデアル。

尙ホ元祿十一年ニ祠官筒井治部ガ両社ノ諸役人ヲ寄合、先年ヨリノ祇式ヲ詮義セシメテ書記シタモノニ委シク載セテアル。

其後貞享年間ニ阿津ノ祠官小山右京、郡村ノ祠官雛波五郎兵衛、同井上彦太夫、宮浦ノ神子等ガ御宮林下苅ノ事ニ付爭議ヲ起シ其等ノモノハ皆高島神社ノ奉仕ヲ免ゼラレ一時岡山市ノ春日神社ノ祠官高原氏ガ高島神社ヲ預ツテ居タガ元祿二年小串ノ祠官ニシテ此地方ノ組頭役タル筒井氏ニ此ノ宮ノ祠官ヲ命ゼラレテ今ニ至ツテ居ルノデアル。

其後モ右両社合併ノ御祭禮明治維新ノ頃迄ハ繼續シテ居タモノデアル。

明治五年祠官筒井直太郎、戸長湧川深七郎連名ノ書上ニモ

日本紀ニ相見候　神武天皇三年之間御鎭座之事も同島も相違無御座與奉存候夫故御同社御祭神も御同神ニ而御座候猶又祠官も往古者前申上候通三人迄御附被成中古より一人ニ候得共御社柄と奉存、月々両三度渡海仕御膳献上　御寶祚萬々歳五穀成就萬民安全之祈願仕候トアリ。

阿津村ノ人々ハ新ニ八幡宮ヲ奉祀スルト雖トモ尙ホ高島明神ヲ崇敬スル事ハ少シモ變ラズ日常明神鼻ヘ出デ、高島神社ヲ遙拜スルノデアル尙ホ老衰シテ命旦夕ニ逼レル者ニシテ今一度明神鼻ニ行キテ高島明神ヲ遙拜シタシト云フ人ガ往々アルトノ事デアル。

宮ノ浦ニ小字高島面ト云フ地名ガ殘ツテ居ル、之ハ古代高島神社ノ御料地デ有ツタモノデアル地名ニ面ヲ附スルノハ少クトモ室町期以前ノ事ニ屬スルモノデアル之ヲ以テ見レバ古代ヨリ其ノ御料地ノアリシ事ヲ知ル可キデアル。

此ノ高島面ト云フ字ハ古キ撿地帳ニモ載ツテ居リ其ノ面積ハ壹町四反アルト云フ、阿津村寶積院ノ僧舜仙ナルモノガ高島神社ノ社僧ヲ務メテ居タ頃迄ハ此ノ高島面ノ社領貳拾石アリシトノ事ガ筒井氏ノ古記錄ニ見ヘル。

又タ天保十一年子十二月ノ宮浦ノ村入費割賦帳ニ

百十七匁五分　　高島宮御繕之節夫役

但シ小串、阿津、宮浦三ケ村ノ割

トアリ之ヲ以テ見ルモ高島神社ノ諸費用ハ右三ケ村ニ割賦シテ居タ事ヲ知ル可キデアル。

又タ阿津ノ神子ニシテ元ト高島神社ニ奉仕セシ者ノ家ニ古クヨリ云ヒ傳ヘラレタル神樂歌ガ四章アル其ノ第三章ト第四章ニ左ノ詞ガアル

秋くれはこの上てらすいなつまや光のまゝに御所へ參らふ

冬くれは御山はあられ里はしも田土の浦につるのすこもり

明治三年ニ阿津ノ祠官兒山豊ト云フ人ガ以上記述セル御神事ヤ地名ヤ神樂歌等ヲ阿津ノ八幡宮ノ事柄ニ記載シテ其宮ヲ田土浦坐神社ナリトシテ岡山藩ヘ提出セシ事アリシガ其時、藩ノ係員ハ其等ノ事柄ハ八幡宮ノモノニハアラズ高島神社ノ事柄ナル故ニ訂正セヨト命ジタノデアルガ兒山氏ハ頑固ニシテ命ニ從ハズ、其儘ニナリシ事ガ小山氏ノ記錄ニ殘ツテ居ル。

又タ小山家ノ記錄ニ兒島記ト云フモノヨリ抄出シテ壽永、安元ノ頃、田土ノ浦ニ坐神云々ノ事アリト記シテアル。

明治二年八月當社祠官筒井杢之允氏ノ書上ヲ見ルト

竹島神社者當國官社百二十八社之内ニ而御座候先達而神祇官江御達シニ相成居中候御上御建立所ニ而私先祖ヘ祠官職被仰付候云々トアリ　是レニ依リテ見レバ明治維新ノ際岡山藩ニ於テハ既ニ當社ヲ元トノ官社ト認メテ神祇官ヘ上達シ神祇官ニ於テモ之ヲ認メテ居ラルゝ筈デアル。

以上記述スル所ニヨリテ見ルモ田土ノ浦ハ兒島郡ノ北岸ナル小串、阿津、宮浦一帶ノ名稱デアリ此ノ田土ノ浦ニ屬スル高島ニ御鎭座アル高島神社ガ此ノ田土ノ浦一帶ノ氏神デアリ備前國總社ノ神名帳ニアル田土ノ浦坐神社ナル事ヲ知ル可キデアロウ。

殊ニ御旅所ニ　天皇ノ稱ガアリ神樂歌ニ御所ヘ參ラウト云フ語ノアル事等ハ乃チ此ノ神社ニ　神武天皇ヲ奉祀シアル事ヲ證明スルモノデアロウ。

吉備溫故秘錄ニ云フ

春日大明神　七日市村　祠官高原氏　神官壹人

社司ノ說ニ元曆年中佐々木三郎盛綱當社ニ戰功ヲ祈リ白羽ノ矢ヲ献ス（此矢今ハナシ鏃ノミ殘レリ）其後盛綱兒島ヲ得シ時高島ニ燈明ヲトボシ春日大明神ヲ祭ル。コレニヨリテ高島ヲ燈明島ト云、トアリ今高島ニハ最早古キ燈臺ノアリシ痕跡ハ殆ンド堙滅シテ居ルガ古老ノ話ニハ以前ニハ古キ燈臺ノ基礎ラシキモノアリシトノ事デアル。

又タ神社ノ御内陣ニハ古キ金幣ト明ル魂、照ル魂ト稱スル二個ノ木製ノ寶珠トガアル此ノ寶珠ハ年代古ク鎌倉期若クハ其以前ノモノト思ハレ世間稀有ノモノデアル、又タ天照大御神ノ小サキ木像ガアル是ニハ願主○門花押、藤沖山○光院等ノ文字ガ見ヘル後ニ何人カゞ納メシモノト思ハレル。

又タ古ク藤原期ノ作ト見ユル觀世音菩薩ノ木像モアル。

又タ神寶トシテ古鏡ガ一面アル其徑三寸一分菊紐ニシテ双雀ト松花ノ模樣アリ其外周ニ小サキ珠文ヲ繞ラシ尙ホ其外郭ニ菊花紋ヲ繞ラサレテアル其年代ハ鎌倉期ノモノト思ハレル。

又タ大型ノ土版塔ガ一基アル高サ、三寸七分両面ニ梵字ヲ押シ古色黑ク其年代ハ亦タ鎌倉期ノモノデアル此ノ型式ノ土版塔ハ我岡山縣ニテハ之レニテ三個ノ發見デアリ縣外ニテハ播磨ノ法光寺ト但馬ノ溫泉寺ト全國ニテ都合五ケ所ニ發見セラレシノミノ物デアリ、其ノ類例ノ稀ナル品ナルガ而カモ此所ニアル土版塔ガ類品中ニテ尤モ優大ナルモノデアル此ノ土版塔ハ元トハ安行附都ノ　神武天皇ヲ奉祀セシト云フ開持殿ニアリシモノカト思ハレル。（開持殿ノ事ハ後ニ記ス）

中古神佛混淆ノ際ニハ種々ノ物ガ交ツテ居ルノデアルガ兎ニ角、佐々木盛綱奉燈ノ文献ト云ヒ高島面ノ名稱殘レルアリ。古キ寶珠、古佛像、古鏡、土版塔等種々ノ遺物ノ殘存スルヲ以テ見ルモ中世期ニ於テモ此ノ高島神社ハ世ノ崇敬相應ニ隆カリシ事ヲ想ヒ見ル可キデアル。

江戸期ニ入リテハ備前藩主池田侯歷代ノ崇敬ガ最モ厚カリシモノデアル池田光政公ノ時ニ若干ノ田租ヲ納レラレシ事ガ社記ニ見ヘル又タ安永十年二月付ニテ社領トシテ毎年代米拾俵半、閏月有之ハ拾壹俵頂戴スル事トナレリト記シテアル。

又タ社殿其他ノ造營修繕等モ常ニ藩吏ヲ使ハシ總ベテ藩ノ費用ヲ以テ支辨セラレテ居ル其一例トシテ元祿二年ノ棟札ヲ左ニ掲グ

（表　面）

御奉行　箕浦善左衛門元氏

干時元祿貳己巳天　　御横目　　石津八兵衛氏一

當宮御再興國守松平伊豫守綱政公

二月十五日　　棟梁岡山大工町小池彦兵衛尉藤原吉久

（裏面）

御本社　御末社者修補　拜殿長床御再興

拜殿長床　貳間ニ三間　拜殿　貳間ニ六間　長床

但先年者　貳間ニ六間　拜殿　貳間ニ九間　長床

其後モ度々修繕ハ加ヘラレテイルガ今尚ホ此ノ元祿御再興ノ社殿ガ存シテ居ルノデアル其ノ結構ハ可成リ優秀ノモノデアル。

又タ本社ノ御遷宮ニハ其時ノ備前神職ノ總頭タル大守藩内左衛門或ハ岡越後守等ニ命ジテ之ヲ行ハシメラレテ居ル其下ニ大頭壹人神職十二人、禰宜壹人、神子三人、神人四人等ガ之レヲ奉仕シテ居ル尚ホ寺社奉行以下ノ役人モ參列シテ居ルノデアル。

而シテ御遷宮ニ要スル諸費用ハ勿論其レ等ノ神官等ノ祝儀、總人員五十餘名ノ賄ヒ神官其他ノ迎送諸荷物ノ運搬等迄盡ク藩費ノ支辨ニナツテ居ル。

尚ホ御遷宮ノ際ニ奏セラレシ藩公祝詞ノ一例ヲ次ニ掲グ。

掛麻久毛畏岐備乃前州兒島郡高島大明神乃宇屬乃廣前仁恐美恐美毛白左久瑞宇數歳月乎經天片割乃行合乃間與理霜漏露滴留故仁國主從四位下侍從源齊政朝臣甚神慮乎崇女敬天命有司仁神殿乎資改天今歳文化元歳次甲子四月十五日良辰乎擇太御神乎大殿仁遷志奉留當社祠官藤原吉道遷座乃事於司利任神代乃古法、弱員仁太手繦乎取掛、天津金木乎千座仁置足志天山仁住物者毛乃和物、毛乃荒物、大野原仁生物者甘菜、辛菜、青海原仁在物波鱸乃廣物、鰭狭物、鹽津藻菜、邊津藻菜仁至滿天御酒波甕上高知甕腹仁滿並天品々乃品乎如横山積道天太御神乃御心乃任仁備奉留此狀乎平介久安良久聞食天天下安靜國家平全、五穀豊饒殊仁波國君武運延長、子孫繁茂八十連續仁至滿天日夜防護乃冥助乎賜賜防止恐美恐美毛白

辭別而白天申左久今夜齋庭仁集來留中仁不計汚穢不淨乃輩在天大御神乃御心仁不叶止毛廣久太奈留御心仁任世天咎毛無久崇毛無久守護幸賜賜止恐美恐美毛白

文化元年甲子四月十五日

又タ藩公其ノ他ノ御祝年御祈禱御秡献上等ノ例モアリ又タ藩公其他ノ御參拜或ハ藩士ヲシテ代參セシメラルヽ事モアル是等ノ事柄ハ今ハ唯檪要錄ヤ筒井氏ノ記錄ニヨリテ其一端ヲ見シノミナルガ尚ホ池田侯爵家ノ文書ヲ調査スレバ頗ル多クノ資料ガアル可キ筈デアル。

又タ當社ノ隨神門ハ岡山ノ藩士寺見三右衛門尉正貞ノ寄進セシモノニテ全部豊島石ヲ以テ構造セラレテイル斯ノ如キ隨神門ハ類例ナキモノト思フノデアル藩士其他一般ノ崇敬モ厚カリシ事ヲ知ル可キデアロウ。

舊藩主池田家ノ社留ニ　　正德五年九月二十二日

一、兒島郡高島大明神前に而往來の船々より初尾之錢米海中江投捨申候私より小舟を出し直に請取御供に仕、御神前江備申度旨、右祠官小串村筒井治部願に見垣近江守、同村名主、奥書に而差出候處、願之通被仰付、トアリ。

又タ寛延四年祠官筒井治部ノ書上ニ

往來他國之船裝候而參詣も仕候故、御國御外聞與奉存一ケ月ニ四五度も掃除仕候云々トアリ。

又タ弘化三年祠官筒井治部介、書上ニ

夏分坏者漁船遊船其外他國船等集居申節者船頭仲間口論等仕、舟つたひ仕候故御供物坏穢し候事も折節出來仕迷惑仕候、云々トアリ。

此等ヲ以テ見レバ此ノ高島神社ハ獨リ備前國内ノ人々ノミナラズ航海ノ諸國ノ船舶其他ノ人々等迄廣ク崇敬參拜セシ事ヲ知ル可キデアル。

廢藩後此島ハ嵐濱夫氏ガ移住シテ開拓シタノデアルガ後チ藤田男爵家ノ有ニ歸シ大正十三年藤田家ヨリ此ノ高島神社ノ境域ヲ氏子タル宮浦邑ヘ分讓セラレタノデアル其ノ顚末ハ神社ノ傍ニアル碑文ニテ明カデアル乃チ左ノ如シ

距岡山市南三里海中有孤島曰吉備高島風光明媚、境極幽邃有　神武天皇祠焉相傳　帝東征駐驆之處、此地本屬男爵藤田氏所有今分讓神域與宮浦村民感激其志祇修祀典以隆其禮抑敬神崇祖實我國体之精華也、爲鄉人者六親相和各勵其業宜効報本之誠以盡奉公之節矣

大正十三年四月

醫學博士　男爵　佐藤達次郎　書

文學博士　塩谷　溫　撰

御本社ノ側ラニ御末社海龍王神社ガアル此ノ御祭神ハ豐玉彦命、豐玉姫命ノ二柱デアル此ノ二神ハ海神派民族ノ祖神デアツテ神武天皇ノ外祖父ト祖母ニ當ラセラルヽ神デアル此ノ二柱ノ神ガ此處ニ奉祀シアルハ又タ大ニ意義アル事デアル何トナレバ此ノ二柱ノ神ハ所謂龍宮界ノ神デアツテ海ヲ支配セラルヽモノデアル。古ヨリ今ニ至ル迄人皆、海上ノ安全ヲ此神ニ祈リ海ノ幸多キヲ此神ニ願フハ周知ノ事デアル。　神武天皇ハ此ノ神ノ御孫デアリ此神ヲ祖神トシテ崇敬スル海神派ノ民族ヲ懷柔シテ此地ニ行幸アラセシモノナレバ此神ヲ崇敬セラレシ事ハ疑フ可カラザルモノデアル

日本書紀ヲ見ルニ　神武天皇ノ御軍船ガ紀伊ノ沖ニテ暴風ニ遇ヒ給ヒシ時ニ皇兄稻飯命ハ歎ジテ曰ク嗟乎吾祖ハ則チ天ツ神、母ハ則チ海ノ神ナリ如何ゾ我ヲ陸ニ厄シ復タ海ニ厄スル乎ト言訖ツテ乃チ劒ヲ拔イテ海ニ入リ化シテ鋤持ノ神トナル、皇兄三毛入野命、亦タ之ヲ恨ンデ曰ク我母及姨ハ並ニ是レ海神ナリ何ン爲レゾ波濤ヲ起シテ以テ灌溺スル乎ト則チ浪秀ヲ蹈而常世ノ鄉ニ往クトアリ

乃チ　天皇ノ御一族ハ海上ノ安全ヲ此ノ二神ニ信賴シテ居ラレシ事ガ窺ハレルノデアル故ニ此地ニ御行在アリシ頃モ一ニハ海神派民族ヲ懷柔ノ爲メニモ此神ヲ祭祀セラレシモノデアリ又タ着々トシテ軍備ヲ充實セラレツヽアル際爰ニ此神ヲ祭リテ海路ノ安全ヲ祈リ賜ヒシ事ヲ察知ス可キデアル。

此ノ海龍王神社ハ其ノ創建ノ年月等ハ詳カデナク　神武天皇御駐驆ノ當時ヨリ祀ラレアリシ哉否哉ハ明カデナイガ何時之レヲ奉祀セラレシトスルモ往昔　神武天皇ノ奉祭シ賜ヒシニ因ミテ建營セラレシモノト見ル可キデアロウ。

此ノ海龍王神社ハ些爾タル御末社デハアルガ備前藩主歷代ノ崇敬ハ御本社ト同樣ニ厚カリシモノデアル、社殿ノ御造營御修理等モ皆御本社ニ準ジテ藩費ヲ以テ支辨セラレ其ノ御遷宮ノ事モ御本社ト同時ノ際ニハ備前神職ノ總頭岡越後守ガ執行ヒシ事モアリ、單ニ御末社ノミノ時ハ祠官筒井氏ガ執行ヒシ事モアル之ヲ他ノ例ニ比較シテ見ルニ御末社トシテハ殆ンド特別ノ優遇タリシ事ヲ知ル可キデアル。

神武天皇ヲ奉祀シアル此ノ高島神社ニ御末社海龍王神社ノアル事ハ寔ニ當然デアリ此ノ御末社ノアル事ハ又タ此島ガ　神武天皇ノ高島行宮ノ御聖蹟ナル事ヲ裏書ス可キ一證トモナルモノデアロウ

之ヲ要スルニ當高島神社ハ古代ヨリ　神武天皇ト春日ノ四神トヲ合祀シアリテ延喜式神名帳ニモ載セテアリ古ヨリ今ニ至ル迄世人ノ崇敬隆キモノナレバ當然之ヲ官幣社ニ昇格セラル可キモノト思ハレル然ルニ未ダ縣社ニモ列セラレズ一村社トシテ措カレアルハ吾人ノ甚ダ遺憾トスル所デアル。

△上道郡高島村ニモ高島神社ガアル此ノ神社ハ延喜式神名帳ニハ見ヘヌガ、室町期ノ備前國總社ノ神名帳ニハ載ツテ居ル故ニ可ナリ古ルイ神社デアル此ノ御祭神ハ近世デハ　神武天皇ト云ハレテ居ルガ此處ニモ世々雨ヲ祈リシ事ヲ傳フルヲ以テ見レバ矢張リ　神武天皇ト春日ノ神トヲ合祀シアルモノト思ハレル然ラバ備前國ニハ兒島郡ト上道郡トニ同ジ高島神社ガ二ツアル譯デアル是ニ就テ少シク我ガ見解ヲ述ベルデアロウ、此ノ上道郡高島村ハ昔シ備前國府ノ在リシ所デアル、字、今在家ニ國長宮ト云フノガアル。國長ハ乃チ國廳ノ轉訛デアツテ其處ガ國廳ノ跡ト見ル可キデアル其ノ東方ニ國府市場ト云フ地モアル、此國廳ノ跡ヨリ北ニ距ル事拾餘町ニシテ龍口山ノ麓ニ備前ノ總社ガアル是ハ備前國百二十八社ヲ合祀シタモノデ國司ガ國内ノ諸社ヲ一々巡拜スルノハ煩ハシキ爲メニ國廳ヨリ程近キ此處ニ合祀シテ、日常禮拜シタモノデアル此事ハ諸國トモ同一ナルハ周知ノ事デアル此ノ總社ノ東數町ニシテ矢張リ國廳ノ跡ヨリ捨數町ヲ

距ル所ヲ高島鼻ト云ヒ其處ニ高島神社ガアル之ヲ按ズルニ國府ノ廳ヨリ兒島郡ノ高島ヘハ四里計リモアリ且ツ海ヲ隔テヽ居ル故ニ日常參拜ニ不便ナルヲ以テ又タ此處ニ高島神社ヲ勸請セシモノト思ハレル。兒島ノ竹島神社ハ藤原眞葛ノ奉祀セシモノト云ハレテ居ル眞葛以後ニモ藤原氏ニシテ備前ノ國司タリシ者ハ幾人カアルデアロウ。其等ノ人ニヨリテ便宜上此處ニ勸請セラレシモノト思ハレル但シ此ノ神社御祭神ハ　皇祖神武天皇ト春日ノ四神トデアルガ故ニ極メテ尊重ス可キ神社デアル且ツ度々雨ヲ祈ル可キ必要モアリシモノナレバ、敢テ藤原氏ニ限ラズ何人ニテモ御勸請申ス可キモノデハアル其ノ延喜式神名帳ニ見ヘタノヲ以テセバ兒島郡ノ竹島神社ヨリハ奉祀年代ノ降リシ事ヲ知ル可キデアル其ノ總社ノ神名帳ニ載セラレアルヲ以テ見レバ總社ノ創建ヨリハ古ルイトモ云ヘルガ總社ノ神名帳モ後ヨリ追加セラル、事モアルナラント思ハルレバ總社ト此ノ高島神社トノ創建ノ前後ハ今爰ニハ決シ兼ヌルノデアル此ノ神社ノ所在地ヲ高島鼻ト呼ブノデアルガ、龍口山ノ麓ナル一小丘ニノミ此名アルヲ以テ見レバ此處ニ高島神社ヲ奉祀セシヨリ乃チ高島神社ノ鼻ト云フヲ約シテ高島鼻ト呼ブニ至リシモノデアロウ。此ノ高島神社ハ　神武天皇ヲ奉祀シアレバ誠ニ崇敬ス可キモノデハアルガ此ノ處ニハ高島行宮ノ遺蹟トモ見做シ得可キモノハ此神社アルノミニシテ其他ニハ何等探ル可キ物ハナイ樣デアル。

△小田郡神島ニ神島神社ガアル此神社ハ延喜式神名帳ニ見ヘテ古キ神社デアル然シ其ノ御祭神ハ詳カデナイ近頃此神社ノ御祭神ヲ或ハ　神武天皇ト稱スル人モアリ或ハ珍彦ト云フ人モアルガ共ニ信ス可キ證據ハナイ古クハ此神社ヲ興世明神トモ稱シテ居タノデアル、又タ大日本史ニハ此ノ神社ハ元ト前面ノ高島ニアリシヲ此地ニ遷座シ奉リシモノト云フテイル由デアルガ該書ハ明治年代ニ入リテ完成セシモノナレバ近世ノ俗說ニ惑ハサレシ說カト思ハレル誠ニ崇敬ス可キ古社デハアルガ　神武天皇ノ高島行宮ノ遺蹟トシテ見ル事ハ出來ヌノデアル國學ノ大家本居宣長モ既ニ古事記傳ニ於テ之レヲ喝破シテ居ルノデアル

△此ノ神島ノ前ニアル高島ニモ近頃　神武天皇ヲ奉祀セシ小祠ガアル然シ是ハ近世此地ヲ高島行宮ノ遺跡ナラント云フ人ガ出來ショリ人家ノ傍ラニ小祠ヲ建テラレシモノデアル苟モ　神武天皇ヲ奉祀シアレバ崇敬ス可キモノデハアルガ遺蹟考證ノ上ニハ價値ナキモノデアル。

此ノ高島ニハ近キ頃迄高島山松林寺ト云フ眞言宗ノ寺院ガアツタ其ノ祀原ヲ尋ヌルニ　聖武天皇ノ天平十一年ニ備前ノ國分尼寺ヲ此處ニ置カレシトノ事デアル、此事ハ今ノ松林寺ニ保存セラレテ居ル明應四年春三月ノ舊記ニモ明記シテアリ其他ノ文獻ニモ散見スル所デアル。

今此地ニハ未ダ的確ナル証據ハ見ラレナイガ、先年此島ノ附近ノ海中ニテ漁夫ガ頗ル厚クシテ布目ノアリシ古瓦ヲ發見セシ事アリシト云ハレテ居ル、其樣子ガ奈良朝期ノ古瓦ト思ハレルノデアル、又タ先日寺院ノ跡ヨリ嚴甕ノ稍ヤ後期ニ屬スル平瓶ヲ發見セラレテ居ル其胴ノ高サ、四寸六分胴徑六寸八分底徑五寸四分アリテ、肩ニ長サ、一寸餘ノ口ヲ附ケテ居ルガ口ハ少シク曲ミテ長徑二寸短徑一寸七分アル、又タ肩部ニヌ此ノ如キ記號ヲ描イテアル、其ノ製作年代ヲ案ズルニ正シク奈良朝期ノモノト思ハレル又タ先日摺鉢ノ破片ヲモ發見セラレテ居ル是モ其年代ハ奈良朝期ノモノデアル、斯ノ如ク此地ニ奈良朝期ノ遺物ガ往々發見セラルヽヲ以テ見レバ其頃寺院ノアリシ事ヲ推察ス可キデアル。

備前國分寺ハ赤磐郡高月村ニ其ノ遺跡アルガ國分尼寺ノ方ハ他ニハ未ダ其遺跡ヲ知ラレズ傳說ノ地モナイノデアル尤モ國分寺遺跡ノ前面ニテ南數町ノ處ニ奈良朝期ノ古瓦ノ破片ガ少許發見セラレシニ由リ其處ヲ國分尼寺ノ遺跡ナラント稱スル人アリシモ、之レハ誤解デアル男國分寺ノ伽藍地ヨリ僅カ數町ノ前面ニ國分尼寺ノアル可キ筈ハナイモノデアル。吾人ノ見ル所ニテハ其ノ地点ハ國分寺ノ山門ノアリシ所ト思ハレル、是ハ奈良朝期ノ各地ノ伽藍址ノ規模ニ比較シテ知ル可キデアル此ノ以外ニハ未ダ他ニハ國分尼寺ノ遺跡モ傳說地モ知ラレヌノデアル。

今此ノ高島ニハ前述ノ如ク奈良朝期ノ遺物ガ往々發見セラルヽト又タ古ク明應四年ノ舊記ニ明記シアルトヲ以テ、乃チ此地ニ國分尼寺ノアリシ事ヲ認ム可キモノデアル。

此ノ島ハ　神武天皇ノ高島行宮ノ聖蹟デアリ又タ風光明媚ノ淨域デアル等ヨリ見テモ此ノ舊記ヲ信ス可キデアロウ。

尙ホ爰ニ此ノ舊記傳說ヲ裏書ス可キ事柄ガアル、此島ヲ南ニ距ル事拾町計リニシテ宮浦ノ内ニ字尼塚ト呼ブ所ガアル、其處ノ岬端ヲ尼崎トモ云フ由デアル、或ル書ニハ雨塚又ハ雨崎トモ書イテイルガ之ハ尼塚及尼崎ト書クノガ正シイデアロウ。

此處ノ丘上ニ古墳アリテ可ナリ大規模ノ封土ノ幾分ガ殘ツテ居リ其裡横口式ノ石郭ガアル現存スル石郭ノ長サハ約二十尺餘モアリ、羨道ト玄室ノ堺ヲ劃スルニ只一個ノ石ヲ向ツテ右側ニ置イテイル以テ所謂片袖式ノ石郭ニ造リシモノデアル、之ヲ橱石ト稱スル由デアル其構造ハ可ナリ宏大デアリ又タ我ガ地方ニテハ珍ラシキ型式ノモノデアル、其規模ヲ以テスレバ相當優勢ナリシ人ノ墳墓タリシ事ヲ認ム可キデアル其年代ヲ考フルニ古墳ノ中期頃ノモノト思ハレル。

此ノ古墳ヲ馬塚トモ稱シテ左ノ如キ傳說ガアル。

源平盛衰記に昔備前國に海佐介といひけるこそ兵の聞へ有ければ西或を鎭められん爲に官兵をさし副られたり官兵は舟に乘けれ共、佐介は馬に乘ながら海の面を歩せて本國に歸りけるが備前の内海に海鹿(いるか)といふ魚に馬を誤たれけれとも馬少しもひるまずして佐介を陸地へ着て後に馬は死けり、其所に堂を立て孝養しけれ馬塚とて今にありと其事實國史等にはみへず云々。

然レドモ海佐介ナル者ノ史傳ハ外ニハ見ル所ナク其事柄ニモ怪ム可キ点ガアリ、之レヲ事實トハ思ハレタノデアル而シテ堂ヲ建テ、孝養シケリトアルモ無論今堂ノアリシ痕跡モナク里俗ニハ前記古墳ヲ馬塚ト呼ンデ居ルノデアルガ之レハ、正シク人ノ墳墓デアツテ決シテ馬ノ墓デハナク且ツ年代ニモ相違ガアル樣デアル。

元來尼塚ナル名稱ハ此邊一帶ノ字名デアルガ恰度其所ニ古墳ノアルヲ以テ、何時シカソレガ古墳ノ稱呼トモ成ツタモノデアロウ。

吾人ノ見ル所デハ元來此邊ノ字名ヲ尼塚ト稱スルノハ古代尼僧ヲ葬リシ墓地ナリシモノト思ハレルノデアル此邊ヨリ奈良朝頃ノ骨壺ノ破片ガ發見セラレテイルノハ會以テ吾人ノ所說ヲ立證ス可キモノデアロウ。

乃チ前面ナル高島ニ國分尼寺アリテ其寺ニ於テ死去セシ尼アレバ此ノ處ヘ送リテ埋葬セシモノト思フノデアル、夫レニ依ツテ此邊ノ地名ヲ尼塚ト稱シケルガ何時シカ古墳ニモ傳ハリシモノト思フノデアル。

斯ク云ヘハ人或ハ疑ハン高島ニアル尼寺ニテ死セシ尼ヲ何故ニ態々海ヲ越ヘテ此ノ處ニ送葬スルカト、然レドモ是レ大ニ理由ノ存スル所デアル。

此ノ高島ハ　神武天皇ノ高島行宮ノアリシ聖地ナルガ故ニ例ヘ國分尼寺ノ存在スルト雖トモ此ノ島ニ死骸ヲ埋葬スル事ハ忌ム可キモノデアル故ヲ以テ、此ノ聖地ヲ穢ス事ヲ避ケテ必ズ對岸ナル宮浦ノ一部ニ死体ヲ送リテ埋葬セシモノデアル。

尙ホ是レハ單ナル吾人ノ憶說デハナク世間ニ其實例ヲ見ル可キデアル、彼ノ安藝ノ嚴島ニハ嚴島神社ノ鎭座マシマスガ爲メニ古ヨリ今ニ至ルマデ其島内ニ死者ヲ葬ムル事ナク必ズ對岸ノ地ノ御座(ニヲ)ニ送リテ埋葬スルノデアル。尙ホ彼ノ島ニテハ女人懷姙シテ臨月ニ及ヘバ又タ必ズ之ヲ對岸ニ送リテ分娩セシムルトノ事デアル。

此ノ實例ヲ以テ推シ考フルモ此ノ豫キ高島行宮ノ御聖蹟ニハ例令寺院ノアリシト雖トモ決シテ死者ヲ此島内ニ埋葬セザリシ事ヲ知ル可キデアロウ。

後世ニ至リテモ松林寺ノ僧侶ノ墓モ一モ此ノ高島ニ存スルモノナク對岸ナル宮浦ニアル寺院ノ墓地ニ之レヲ存シテ居ルノデアル。

乃チ元トノ千手院ノ墓地ニ四基ト元トノ福壽院ノ墓地ニ三基トアル此等ノ墓地ハ山ノ中腹ニアリテ急傾斜面ニ少許ノ地ヲ抔キテ造ラレシモノナレバ往年幾度カ崩壞セシ事アリテ、墓石ノ失ハレタルモノモ有リトノ事デアル、今ノ松林寺ニ殘レル過去帳ニ見ユルモノニテ墓石ノ存セザルモノ尙ホ八点アリ又タ高島ノ松林寺ニハ無住ノ時モアリテ多クハ阿津ノ寶積院、北浦ノ本覺院等ヨリ兼任セシモノデアル。

何レニスルモ高島ニハ奈良朝期以來近代迄寺院ノ存在セシ事ハ確實ナルモ絕ヘテ其島内ニ死骸ヲ葬リシ痕跡ハナイノデアル、前述ノ如ク宮浦ノ内ニ尼塚ナル地名ノ存セル事ハ、則チ以テ此ノ高島ニ國分尼寺ノアリシト云フ舊記ヲ裏書スルモノデアリ、又タ此島ガ　高島行宮ノ聖蹟ナル事ヲモ立證スルモノデアロウ。

尙ホ此寺ハ盛衰變革常ナキモ世々觀世音菩薩ヲ本尊トスル事モ亦タ國分尼寺ニ想應ハシキモノデアル又タ堂ノ前ニ巨松アリテ

之ヲ千年松ト稱シテ居タトノ傳說アルガ、此松ハ今モ尙ホ存シ巨幹頗ル奇觀ヲ呈シテ居ルノデアル是レ亦タ此ノ處ニ古キ寺院ノアリシ事ヲ物語ルモノデアロウ。

又タ明應四年ノ寺記ニ　文德天皇ノ仁壽年間ニ安行僧都ト云フ者アリ靈夢ニヨリテ此島ニ來リ寺ヲ再興ストアリ此ノ安行僧都ハ弘法大師ノ弟子ト云フ事デアル此時ヨリ寺名ヲ持寶寺ト稱シタノデアル其文左ノ如シ。

諸國巡觀之日偶々當島ニ來リ遍ク島中ヲ歷覽スルニ地勢風物夢裡ノ所見ニ髣髴タリ、則チ初テ神遊ノ實ナル事ヲ知リテ感歎止マズ、喜歡極リナシ則チ往年尼寺之蹤迹ニ就テ一道場ヲ營建シ、且ツ親ラ聖觀自在ノ肖像ヲ鍥リ、而シテ頭面之中ニ其ノ齋シ來ル所ノ觀音ノ少像ヲ納容シテ以テ本尊ト爲シ側ラニ一院ヲ建テヽ、止息安禪之棲ト爲ス今之持寶寺是ナリ（原漢文）トアリ

又曰ク夫レ盈缺ヤ天之定數カ僧都臨島自來荒蹤鬱乎トシテ、再ビ榮場ト爲リ恒ニ玄敎ヲ布演シ久ク蒼生ヲ敎化ス。然ルニ往シ至德二年二月十二日鬱收ノ災有リテ佛棲僧宇咸ナ焦土ト爲リ、陳編寶器多ク灰燼ニ委ス吁、奇ナル哉此時本尊面內ノ小像猛焰ノ中ニ在リテ儼然トシテ恙ナシ爰ニ位持ノ僧侶愁眉ヲ開テ感悅シ群集ノ村民悲淚ヲ拭ヒテ、隨喜ス寔ニ以テ火モ燒ク能ハザルノ說實ニシテ虛ナラズ云々。

此ノ胎內佛ノ小像ハ其後久シク行衛ガ不明デアツタガ、近頃又タ之ヲ發見セラレテ居ルノデアル高サ、一寸八分ノ聖觀世音菩薩ノ銅像デ所謂閻浮陀金ノ作デアル、其年代ハ飛鳥朝期ノモノト思ハレル彼ノ東都淺草寺ノ御本尊ヤ長野善光寺ノ御本尊ナゾト同式ノモノデアル、今ハ大部分ガ傳世澤ヲ帶ビテ居ルガ一部ニハ火氣ヲ受ケタ痕跡ガ見ユル。

尙ホ同寺記ニ次ノ如ク識シテイル。

島嶺ニ有ニ一高岩一側ニ構二一殿一鎭ニ祭シ　神武天皇ヲ以爲ニ地主一神ト且ツ修ニ百座一法施ヲ傍ニ增シ於神威一祈ニ念ヲ於護法一卽チ今ノ聞持殿是也、原（たづねるに）夫レ當島ハ往昔　神武天皇東征之日所ト起ニ行宮一循ニ舟楫ヲ蓄ヘ兵食ヲ之地也、其ノ由ヲ載セテ國史ニ昭著也、方ニ營ニ建スルコト於此ノ神殿ニ（もとづいて）職而由レ之耳

乃チ前ニ述ベシ如ク此ノ岩ハ　神武天皇親ラ天神地祇ヲ祭リ賜ヒシ靈蹟デアル、平安朝ノ頃既ニ釋氏ニ依ツテモ之ヲ尊敬セラレテ神殿ヲ造リ奉祭セラレシ事ヲ知ル可キデアル、而シテ百座ノ法施ヲ修メテ神威ヲ培增ストアルハ乃チ一百ケ日間ノ法會ヲ營マレシモノデアル、其儀ノ如何ニ盛大ナリシカヲ知ル可キデアリ、其ノ崇敬ノ念隆カリシ事ヲ見ル可キデアル。

此ノ聞持殿ノ遺跡ハ靈蹟ノ巨岩ヨリ南三四十間ノ處ニアル、今ニ其處ニ平安朝期ノ礎石ガ殘ツテ居ル、南ニ向ツテ間口十二尺九寸奧行十六尺二寸ノ礎石ガ方形ニ併列シテ都合拾貳個元ノ儘ニ殘存シテイルノデアル、尙外ニ貳個宛二ケ所ニ派出シタ礎石ガ四個アル、此ノ處ニ近世乾朱塗ノ神殿ガ殘ツテ居タ事ヲ古老ハ知ツテ居ルノデアル。

今高島神社ニ在ル鎌倉期ノ土版塔ハ或ハ元ト此ノ聞持殿ニ在リシモノカト思ハレル、又タ阿津ノ寶積院ニ現存スル平安朝期ノ文殊菩薩ノ畫像モ此ノ聞持殿ニ在リシモノカト思ハレル文殊菩薩ハ乃チ、　神武天皇ノ御本地佛デアル。

該寺記ニ又曰ク是ノ島ハ觀音大士遊戲之地、北斗七星降臨之靈區ナリト故ニ島中ニ七箇ノ墳臺ヲ築キテ北斗七星ヲ祭祀ス其墳臺今猶僅ニ有ルアリト。

事實北ノ島ニハ今尙ホ此ノ七星ヲ祭祀ノ內ノ三座ガ殘ツテ居ル、尙ホ北端ノ山上ニ巨石アリテ里俗「ナベブタ」ト呼バレテ居タガ、岡山藩ニ後樂園ヲ築造スル際ニ其石ヲ執リ行カレシトノ事デアル故ニ若シ後樂園內ヲ隈ナク精査スレバ、或ハ此石ヲ見付カルナランカト思ハレル案ズルニ、是レガ七星ノ第一座ナリシモノナラン。

古書ヲ見ルニ北斗七星ハ星中ノ最モ位高キモノニシテ、之ヲ皇室或ハ朝廷ニ擬スルモノデアル、

史記ニ曰ク中宮ハ大極星、其一明ナル者太一ノ常居也、傍ノ三星ハ三公ナリ或ハ曰ク子屬後句スル四星、末ノ大星ハ正妃ナリ

餘ノ三星ハ後宮之屬也之ヲ環リ匡衡スル十二星ハ藩臣ナリ皆紫宮ト曰フトアリ

又曰ク北斗ノ七星ハ所謂旋璣玉衡以齊（ととのへ）ニ七政一。

又タ考要ニ云フ七政者日月五星也、第一ヲ正星ト曰フ陽德ヲ主トル天子之象也、二ヲ法星ト曰フ、陰刑ヲ主トル女王之位也、三ヲ令星ト曰フ中禍ヲ主トル、四ヲ伐星ト曰フ天理ヲ主トリ无道ヲ伐ツ、五ヲ殺星ト曰フ中央ヲ主トリ四傍ヲ助ケ有罪ヲ殺ス六ヲ危星ト曰フ天倉五穀ヲ主トル、七ヲ部星ト曰フ兵ヲ主トル。

佛教辭典ニ曰フ北斗七星、一ニ貪狼星、二ニ巨門星、三ニ祿存星、四ニ文曲星、五ニ廉直星、六ニ武曲星、七ニ破軍星ナリ是七星北方ニ在テ斗ノ形ヲ成セバ北斗七星ト云フ。

又曰ク尊星王ノ法トハ此七星ヲ祈念スルナリ。

是ヲ以テ見レバ安行僧都ガ北斗七星ノ壇ヲ設ケテ祭リシ事モ亦タ此ノ島カ　神武天皇ノ御聖蹟タルノ故ヲ以テ、アル事ヲ知ル可キデアル。

此ノ持寶寺モ前記ノ如ク至德二年二月十二日ニ火災ニ罹リテ灰燼ニ歸シタトノ事デアル。

以上記載スル所ニ依リテ見ルモ此ノ明應四年ノ寺記ハ其節々ガ善ク實證セラルヽヲ以テセバ此ノ舊記ハ頗ル信憑スルニ足ルモノナル事ヲ知ル可ク其年代ノ古キト記述ノ確實ナル等世間稀有ノ寶典デアル。

此ノ持寶寺ハ災後衰微ニ歸シ僅カニ小庵ヲ結ビテ命脈ヲ保ツテ居タ由デアルガ慶長年間ニ備播ノ藩主池田利隆公ガ之レヲ再興セラレ、此時寺號ヲ高島山松林寺ト改メラレシトノ事デアル爾來歷代藩主ノ庇護厚ク、寺領高貳拾石ヲ寄進セラレ造營修理等モ補助セラルヽアリ、斯クテ此寺ハ壇家トテハナク唯藩公保護ノ下ニ明治維新迄持續シテ居タガ廢藩後遂ニ退轉シタノデアル。

今此寺ノ寺號ト本尊、緣起等ハ對岸ナル宮浦ノ元ノ福壽院ニ保タレテアル又タ此寺ニ在リシ平安朝期、鎌倉期等ノ古キ佛畫及ビ卷物等ハ甲浦村大字北浦ノ本覺院ニ存シテ居ル、又タ小串村大字阿津ノ寶積院ニハ元ト此ノ寺ニ在リシト思ハルヽ銅ノ燈籠ガアル夫レニハ菊花紋章ヲ透彫シテアル優秀ノモノデアル、又タ同寺ニハ平安朝期ノ文殊菩薩ノ畫像ガアル事ハ前ニ述ベタガ尙ホ紺紙金泥ノ阿彌陀經一卷其末尾ニ

誓願無談必來迎引攝給、以此功德聖靈決定增進佛道

安貞二年四月十日母服中書之

トアリ此ノ經卷ハ同寺ニアル鎌倉期ノ阿彌陀如來ノ木像ノ胎內ニ納メテアリシ物トノ事デアル是レ亦タ元ノ持寶院ニアリシモノヽ樣デアル、又タ松林寺ノ客殿ハ今ハ同郡八濱町ノ金剛寺ニ移シ建テラレテ居ル、其構造ヲ見ルニ用材モ優良ノモノヲ使ヒ

右　大將實氏

可ナリ。宏大ノ建物デアリ藩公御入リノ間モ元ノ儘ニ存シテイル、此ノ建築ヨリ推シテ見レバ元トノ松林寺ナルモノハ可ナリ宏大ノ寺院ナリシ事ヲ知ル可キデアル。

以上記述スル如ク此ノ高島ハ　神武天皇高島行宮ノ聖蹟タルノ故ヲ以テ古來神佛兩道ヨリ之ヲ崇敬スル事ノ頗ル甚大ナリシヲ知ル可キデアル。

我邦中世期ニ於テ佛教ノ盛ナルニ及ンデハ　神武天皇ノ御聖蹟モ釋氏ノ尊敬セシ事ハ當然デアル、故ニ此島ニ於テハ神佛兩道ヨリ御聖蹟ヲ崇敬シテイルノデアル、自餘ノ傳說地ニ於テハ殆ンド釋氏崇敬ノ事實ヲ聞ク所ナキハ吾人ノ不可解トスル所デアル案ズルニ是レ其ノ傳說ノ薄弱ナルヲ示スモノナランカ。

大成經ニ曰ク行宮夜一夜生蕨其長一丈二尺其太二尺五寸、其色濃黃國有二神人一云二黃光命一即朝奏曰此草異艸也當レ治二八州一祥、是天爲瑞軍卒號之故道、此國號黃蕨曰、

トアリ此事ハ後世ノ識作ナリト云ハレテ居リ吾人モ亦タ然リトスルモノデアル、然シナガラ此ノ謂文モ全然寢形ナキモノデモナキ樣デアル多少ハ其風貌ヲ窺ハレルノデアル。

此ノ島ニハ今ニ至ルモ善キ蕨ヲ生ズル現時雜草ヲ低ク苅ラレアリテモ尙ホ高サ、二尺以上ニ達スルモノガアルトノ事デアル雜新以前竹木雜草ノ繁茂セシ頃ハ高サ數尺ニ達セシモノモアリシ事ヲ傳ヘラレテ居ル、サスレバ長サ、一丈二尺ト云フノハ誇大デアルガ之ヲ字句ニ拘泥セズ丈ケ二尺ト解スレバ實際ニ合フノデアル又タ太サ、二尺五寸ト云フノハ通常莖ノ太サヲ云フノデアルガ、ソレハ到底アル可キモノデハナイ、是レモ解釋ノ仕方ハアル乃チ成長シテ葉ヲ張リシモノ、葉ノ周圍ヲ側レバ二尺五寸位ハ有ルモノモアロウ、又タ其色濃黃ト云フノハ此島ノ蕨ハ芽生ノ時ニハ正シク濃黃デアリ、成長スルニ從ツテ青色ニナルノデアル。斯ク解シ來レハ大成經ノ妄說モ多少ハ據モアルナランカ然シ吾人ハ其說ヲ事實トスルモノデハナイ、唯爰ニ附記スルノハ此島ノ蕨ハ高島ノ早蕨ト稱シテ其風味ノ佳良ナル事ガ古來人口ニ膾炙シテ居ル事デアル。

又タ備前風土記逸文ニ、石上布都魂神社は大松村にあり此社の前に川あり日の川といふ此川南の海に至りて高島山ありこれ日

向に坐し、　神武天皇の行宮なり云々。

トアリ、此ノ風土記逸文モ亦タ後世ノ僞作ト見サレテ居ルガ是トテモ全然無根ノ事ノミヲ書キシモノデモナイト思ハレル、此文ニアル高島山ヲ上道郡高島村ノ高島鼻ニ當テル人モアルガ吾人ハ贊成出來ヌ。

何トナレバ上道郡高島村地方ハ平地ヨリ古代ノ彌生式土器ヲ多數發見セラレルノデアル、是ヲ以テ見レバ此ノ地方ハ我建國頃ヨリ以前ニ既ニ陸地タリシモノデアル、之ヲ尙ホ後世マデ海面ナリシ樣ニ說ク人ノアルノハ全ク誤解デアル故ニ此ノ所ニ風土記逸文ノ說ニハ適合セヌノデアル。

故ノ恩師沼田頼輔博士モ是レハ兒島郡ノ高島トモ云ヘルトノ說デアツタ、事實兒島郡ノ北ノ高島ハ旭川口ノ沖ニ當ツテ居ルノデアル故ニ此ノ風土記逸文モ兒島郡甲浦村ナル兒島灣中ノ高島ヲ指シテ書イタモノデアル。

右大成經ト云ヒ備前風土記逸文ト云ヒ僞書トハ謂ヘ共ニ平安朝頃ノ著作ト見ラレルノデアル、其頃ニ於テ何レモ高島行宮址トシテ兒島灣口ノ高島ヲ採ツテ居ルノハ其頃既ニ斯ノ說ノアリシ事ヲ想見ス可キモノデアロウ。

湯淺常山ノ著、常山樓筆餘卷一ニ曰ク日本紀ニ　神武天皇乙卯ノ年入二吉備國一行宮以居レ之是ヲ曰二高島宮一ト三年ト見エタリ、古事記ニハ吉備ノ高島ニ八年駐蹕ト見エタリ、今ノ高島ノ地ナランニハ其島小サクテ　帝ノ師ヲ駐蹕アルベキ所ニ非ズ、島ヲ去ルコト遠カラヌ兒島ノ北浦ニ宮ノ浦トイヘル所アリ正シキ証ナシトイヘドモ　神武帝行宮ノ跡ナルガ故ニカク名ツゲシニヤトイフ人アリ。

史學雜誌第四編第三十九號ニ河田羆氏ノ　神武天皇東征地理攷ニ據レハ稿ヲ載セテアル、其文ニ曰ク「高島宮ハ鴨祐之注ニ云フ在二備前國一。藻塩草云或說備中國有二其舊址一ト然ルニ今備前兒島灣中ニ高島アリ、又竹島ト云然レトモ小嶼ニシテ師旅ラ駐ム可キ地ニアラズ、其對岸六町許ニ宮之浦アリ、其舊址ナリト云蓋其說從ノ可シ」云々。

右ノ如ク世間此高島ヲ以テ狹小ニシテ　神武天皇ノ御駐蹕アラセシニ適セズトスル說往々之ニアリ、然レドモ是レ蓋シ　神武天皇卿東征當時ノ御軍旅ノ實情ト又タ此島ノ實際ノ廣巾トヲ知ラザル人ノ危言デアル、吾人ハ建國當時ノ事情ニ鑑ミ此ノ高島ニ於テ行宮ヲ置カレ賜フニ決シテ狹小ヲ感ゼラレシ事ナキヲ認ムルモノデアル、然レドモ近キ對岸ナル宮浦ノ地モ御軍備ノ一部ニハ御使用遊バサレシモノト思ハルヽ、然シ是ヲ以テ行ヲ宮浦ノ地ニ營ミ賜ヒシト見ル事ハ出來ヌモノデアル、御行宮ノ所在地ハ矢張リ高島ト認定ス可キモノデアル。

橿原神宮宮司蒐田茂丸氏ノ著ニシテ橿原神社御藏版ノ「はじめの天皇」ト題シアル本ニハ、

翌年の三月六日に瀨戸の海邊を御あるきになつて、むかしの吉備國に御着きになり、又々行宮を御造りになつて今度は三年の間そこに御住居になりました。此を高島宮と申し上げます。今備前國兒島郡にある宮浦と云ふ地が其御址でありませう。

トアリ、是レハ挿圖ニ對照シテ見テモ對岸ノ宮浦ヲ指シタモノデハナク宮浦ノ内ノ高島ト云フ事ヲ略シテ單ニ宮浦トノミ記サレシ事ガ知レルノデアル。

古事記傳ニハ此ノ高島ニハ今ニ神異シキ事アリト云フテアルガ吾人ハ未ダ其多クヲ知ラナイノデアルガ、聞ク所ニ依レバ古來此ノ高島ノ前面ヲ航海スル船舶ハ必ズ檣ヲ仆シテ通航セシモノデアル、若シ檣ヲ立テシ儘ニテ通行スレバ必ズ難船スト云ハレテ居ル。

又タ元祿二年ニ小串ノ祠官筒井治部ガ靈夢ニ高島明神顯ハレ賜ヒ、明日ヨリ汝ヲ臣トス可シトノ御託宣アリシヲ以テ、翌早朝身ヲ清メテ西ノ海岸ニ出デ、高島ヲ遙拜シ祝詞ヲ奏セシ所ニ、岡山ヨリ向ヒノ船來リ會所ヘ赴キシニ果シテ高島宮ノ祠官ヲ命ゼラレシ事ガ同家ノ記錄ニ見ヘル。

又タ高島神社ハ島ノ南ノ低地ニアリテ、海ニ近キモ如何ナル暴風怒濤起ルトモ嘗テ波浪ノ社殿近クヘ及ボセシ事ガナイノデ、里俗ニハ此島ハ浮島ナランカト云傳ヘラレテ居ル。

又タ此島ヘハ古ヨリ未ダ嘗テ死体ノ漂着シタ事ハナイノデアル。

又タ島内ヘ落電タシ事モナイノデ以前ニ島ノ松林寺ヨリ雷除ケノ御守札ヲ出シテ居タモノデアル。

又タ此島ハ風光明媚ナルヲ以テ雅俗ノ來リ遊ブモノ多ク、詩歌記文等モ散見セラレルノデアル。

以上ハ此島ニ於ケル遺蹟、遺物等ヲ略叙シタノデアルガ海中ノ一孤島ナリト雖トモ其遺跡遺物ノ如何ニ多キカヲ知ル可キデアロウ。若シ之ヲ形容スレバ全島是レ皆遺蹟トモ謂ヘルモノデハアルマイカ、

尙ホ此島ニ關スル文献ノ方面ヲ顧ミレバ、

延喜式神名帳、室町期ノ備前國總社ノ神名帳、明應四年ノ持寶寺ノ舊記、享保七年松林寺緣起、天和元年山田剛齋ノ遊高島記明和五年旭川舍旭龍ノ記和辭、穩要錄、東備郡村志、吉備溫故秘錄、大日本地名辭書、はじめの天皇、侯爵池田家ノ文書、祠官筒井氏ノ記錄、祠官小山氏ノ記錄、祠官難波氏ノ系圖、等或ハ引証ス可キモノ或ハ參考トス可キモノアリ其他ニモ尙ホ見ル可キ典籍多カル可シ。

又タ此島ヲ考證セシ先人ヲ尋ネ見レバ、

名寄歐集ニ光俊ノ歌アリ、本居宣長ハ古事記傳ニ高島行宮ノ位置ヲ決定シアラザルモ、其ノ記述振ヨリ見テ此地ヲ尤モ有力視シテ居ラレル、神道管領吉田家ニモ此地ヲ聖蹟ト認メテ居ル備前藩主池田侯ノ歷代ヨリ諸藩士ノ多クハ、此地ヲ聖蹟ト認メテ居ルノデアル、山田剛齋、旭川舍旭龍、土肥經平、平賀元義等ノ考証家モ此地ヲ是認シテイル、文學博士吉田東伍氏ハ、其著大日本地名辭書ニ於テ此地ヲ聖蹟ト主張シテ居ル文學博士塩谷溫氏、橿原神宮宮司蒐田茂丸氏等モ此地ヲ是認シテ居ル、湯淺常山河田熙等ハ此地ヲ認メテハ居ルガ、唯狹小ナリト誤解シテ對岸ノ宮浦ノ地ヲ採ツテ居ルノデアル、夫レガ誤解ナル事ハ前述シタ、恩師沼田頼輔博士ハ吉田博士ノ說ハ他ヨリ一頭地ヲ拔イテイルガ、証據ナキ爲メニ贊成セヌト云ハレテイルガ今吾人ガ以上ノ証據ヲ擧ゲテ記述セシヲ知ラルルアラバ定メシ地下ニ首肯セラレアルデアロウ。

斯ノ如ク各方面ノ文献ニモ亦タ考證家諸先輩モ此地ヲ是認スルモノ尤モ多クアリ、而シテ他ノ傳說地ノ如ク單ニ其地方ノ人士ノミノ我田引水ノ論トハ大ニ懸隔アル事ヲ知ル可キデアル。

爰ニ筆ヲ洗ツテ謹記ス可キ事柄ガアル。

去ル明治十八年八月五日　明治天皇初メテ我岡山縣ヘ御行幸アラセラレ私共草莽ノ民モ、

鳳輦ヲ拜スル光榮ニ浴シタモノデアルガ此日　御召艦横濱丸外二艦ハ兒島灣口外ヘ投錨シ、

天皇ハ汽船狹貫丸ヘ御召替アリテ灣内ヲ龜浦ノ沖迄御進アリ、其處ニテ又タ小汽船ニ御召替アリテ三蟠港ヘ御上陸遊バサレタノデアル、其ノ御途中此ノ高島ノ前面ヲ御通過ノ際　天皇ニハ御親ラ此所ガ　神武天皇ノ高島行宮ノ遺蹟デアルト仰セ遊ハサレシトノ事ヲ傳ヘ聞イテ居リマス。誠ニ賢キ　御言葉デハアリマセンカ、

此島ニハ恐多クモ　神武天皇ノ御神像ガ既ニ三百年來儼然トシテ御頒座マシマスノニ對シ奉リ又タ　明治天皇ノ賢キ　御言葉ニ對シ奉リテハ何人ト雖トモ此島ガ、高島行宮ノ御聖蹟デアルト云フ事ヲ否認スル事ハ出來ヌノデアロウ。

(三)　附近ノ遺蹟遺物

古事記ニ曰ク　神倭伊波禮毘古ノ命(中略)吉備の高島ノ宮に八年ましゝき、かれその國より上り幸でます。時に亀の甲に乘りて釣しつゝ打ち羽振り來る人速吸門に遇ひき、かれ喚びよせて汝は誰ぞと問はしければ僕は國ツ神、名は宇豆毘古とまをしき、また汝は海ツ道を知れりやと問はしければ能く知れりとまをしき、また從に仕へまつらむやと問はしければ仕へまつらむとまをしき、かれすなはち槁を指し度して、その御船に引き入れて槁根津日子といふ名を賜ひき、こは倭ノ國造等が祖なり。

日本書紀ニ曰ク、其年冬十月丁巳ノ朔辛酉　天皇親帥二諸ノ皇子一舟師東征、至二速吸之門一時有二一漁人一乘二艇而至一、天皇招レ之、因問ノ曰汝誰也、對曰臣是國神名曰二珍彥一釣二魚於曲浦一聞二天神子來一故即奉レ迎、又問レ之曰汝能導ノ我導耶、對レ之導レ之矣天皇勅授二漁人椎檮一令レ執而牽二納於臭舟一以爲二海導者一乃特賜ノ名爲二椎根津彥一此卽倭直部始祖也、

國造本紀曰ノ謂二左右一曰浮二海中一者何物之耶、乃進二粟忌部ノ首祖、天日鷲命一使レ見レ之還來復命曰、是有レ人耳、名椎根津彥、即召率來、

右ノ如ク珍彥ノ　天皇ニ從ヒ奉リシ場所ガ二說アル乃チ古事記ハ吉備ノ速吸門トナシ日本書紀ハ豐後水道トシテイル吾人ハ此事ヲ吉備高島ニテ兵備ヲ充實セラレテ、東向ノ御時ト見ルヲ正トスルガ故ニ、吉備ノ速吸門ヲ可トスルノデアル、然シナガラ

此事タルヤ、御軍備全ク成リテ御出發ノ途ト見ルヨリハ三年若クハ八年間高島ニ御座アリシ間ニ、何日カ速吸門ノ邊ヲ御巡行ノ砌御出會ニナリ、珍彦ハ臣トシテ仕ヘ奉リ愈々御東征ノ際先鋒トシテ進發セシモノト思ハレルノデアル。

此ノ珍彦ノ乘リシ亀ノ傳說ガ吉備ノ速吸門ニ近キ邑久郡幸島村ニ殘ツテイル、現ニ亀石ナルモノガアツテ珍彦ノ乘リシ亀ノ石ニ化セシモノト云ヒ傳ヘラレテ居ル。

吉備溫故秘錄ニ曰ク　亀石、邑久郡幸田村ニ在リ昔シ海中ナリシガ享保年墾田トナル（南幸田ハ幸島村ノ字名ナリ）古事記ニ見ヘタル速吸門トイフハ高島ノ東ノ海、今米崎トイフ所ナルベシ、汐ノサシ引、ツヨキ所ナリ又幸島トイフ所ノ濱ニ亀ノ形ナル大石アリテ、今モ里民是ヲ神石ト尊ミ、シメヲ引テアガム。此石則槁根津彦ノ乘リシ亀ノ化シテ石トナリテ後世ニ殘リタルトイフベキ石ニヤ、今幸島ト書ケドモ本ハ龜島ト書テ、カフ島ト呼ケルニヤト寸簸ノ塵ニアリ、

和氣紹ニ曰フ何ノ年カ此石ヲ船ニテ岡山城下ヘ引ントセシメ西川口迄來リ船止リテユカズ、奉行ヲ初メ水主梶取力ヲ盡シ漕入ントスレ共少モ動カズ釘ニテ打付タルガ如シ、爲ナク又此所ヘ送リ返ストイフ。

此石ヲ御神体トシテ龜石神社ト稱シ此村ノ產土ノ神トシテ崇敬シテ居ル、每年夏季ノ祭禮ニハ囃子ノ舟ヲ出シテ海上ニテ盛ンニ祭事ヲ行フノデアル、恰モ嚴島ノ管絃祭ヲ想ハシムルモノガアル。

此ノ龜石ヲ實見セシニ花崗岩質ニシテ大サ、六七尺計リアリ、恰モ龜甲ノ形ヲ爲シ首ガ高ク上カツテ居ル。但シ輪郭計リニテ模樣ハナイ、今ハ餘程磨滅セシ樣子ニテ人工ノ跡ハ見ヘズ、天然ノモノカトモ思ハルヽガ若シ天然トスレバ奇蹟トス可キモノデアル、案ズルニ古代ノ人爲ノモノガ長年月ノ間風雨ニ曝サレテ人工ノ痕ハ消滅シ去リタルモノナランカ、乃チ人爲トシテモ其年代ノ頗ル古キモノナル事ヲ知ル可キデアル、最モ古キ時代ニ造ラレシ事ヲ以テ見レバ此ノ珍彦ノ傳說ノ甚ダ古キヲ知ル可キデアロウ。

此ノ龜石ノ在ル所ハ兒島灣口ノ東側ニシテ所謂速吸ニ近ク又タ高島行宮址トハ相對シテ一里餘ノ距離デアル。

此ノ古キ傳說ノ此處ニアルヲ以テ見レバ、彼ノ珍彦ナル人ハ邑久郡邊ノ土豪タリシモノト思ハレル、高島行宮ニ關スル傳說中、古クヨリ形ノ存スルモノトシテ擧ゲラレアリシハ唯此ノ亀石ノミデアリ、而シテ形アル傳說トシテ尤モ有力ナルモノデアル

△　岡直廬氏ハ上道郡高島村ノ高島鼻ノ麓ニ亀津ト云フ所アリ宇津毘古ノ乘リシ亀ノ付シ所ナリト云ハレシモ、沼田頼輔博士ニヨレバ其所ニ亀津ト云フ所ナシ、亀津ハ上道部芥子山ノ麓ニテ今ハ古都村南方ニアリト云ハレタリ、之レガ實際デアル。吾人之レヲ實地ニ徵スルニ亀ノ地名アル所ニハ、大概古代土器ノ窯址アルヲ以テ、亀ハ乃チ瓶ノ轉訛ナリト思フ乃チ邑久郡美和村西須恵ノ亀ケ原、淺口郡富田村ノ亀山等此ノ例デアル、彼ノ陸中ノ亀ケ岡モ亦タ同ジモノデアル。上道郡古都村邊ハ古墳モ頗ル多ク、又タ古代ニ土器ヲ多ク造ラレシモノト思ハレル、其ノ近キ所ニ土器作リノ祖神三輪ノ大神ヲ祀レル延喜式内ノ社四御神ノ宮ガアルニヨルモ、此邊ニ土器作リノ人共ガ分布セシヲ知ル可キデアル此ノ四御神ノ宮ニハ神殿ニ土師神ト云フ額モ懸ツテ居ル、此ノ亀津ヲ珍彦ノ亀ニ附會スルハ全ク誤リデアル。

邑久郡大宮村藤井ニ國幣中社安仁神社ガアル、此ノ神社ハ延喜式神名帳ニ名神大トアル古社ナルガ其ノ御祭神ハ詳カデナイ。一說ニハ　神武天皇ノ皇兄五瀨命トモ云ヒ神名帳考證ニハ大國主六世ノ孫、阿太賀田須命ノ後、和仁古ヲ祀ルトアリ又タ天照大神ヲ祀ルトノ說モアリ又タ備前ノ國守タリシ秋篠安仁朝ヲ祀ルトノ說モアリ又タ阿知使主ヲ祀ルトノ說モアル。

然シ吾人ノ見ル所ニテハ南洋方面ニハ祖先ノ靈ヲ「アニ」ト稱スル由ナレバ其風ガ彌生式土器ヲ使用セシ原住民ニモ傳ハリアリテ其民族ノ祖先ヲ祀リシモノト思ハレル。

事實此ノ神社ノ附近ニ貝塚ガアリ石器ヤ彌生式土器ヲ多ク發見セラレルノデアル又タ神社ノ境内ヨリ銅鐸ヲ發見セラレテ居ル此ノ銅鐸ハ古代ノ祭器ト云ヒ或ハ樂器トモ云ハレルガ吾人ハ之ヲ正シク祭器トスルモノデアル。而シテ銅鐸ノ發見地ハ殆ンド彌生式土器ノ存在地ト伴フモノデアル、故ニ銅鐸ナルモノハ彌生式土器ヲ使用セシ原住民ノ遺物ト見做ス可キデアル。

此處ニ彌生式土器ノ貝塚ガアリ銅鐸ノアルノハ乃チ古代青銅文化ヲ持ツ優等ノ彌生式土器系ノ民族ガ住居セシ事ヲ知ル可キデアル、而シテ其等ノ民族ガ祖先ヲ祀リシモノガ此ノ安仁神社ナリト思ハレル。

此ノ神社ノ所在地ハ幸島村ノ龜石ノ所在地ト其間約二十町計リノ距離デアル、彼ノ珍彦ガ邑久郡邊ノ土豪トスレバ乃チ此邊ニ

住居セシ是等民族ノ尊長タリシモノト思ハレル、國ツ神ト云フハ土着ノ尊長ヲ稱スルノデアル、彌生式土器使用ノ民族ハ乃チ後ノ海神派ト云ハル、民族タル事ハ疑ヒナキモノデアル。

兒島郡小串村ト邑久郡幸島村ノ間ノ兒島灣口ガ吉備ノ大門デアリ速吸門デアル、此邊ノ海中ヨリ古代ノ土器ヲ發見セラル、事ガ往々アル、其ノ多クハ彌生式土器デアル吾人ノ目擊セル品ノ中ニ口徑一尺七寸ノ大ナル盃形ノモアリ高サ、一寸七八分位ノ臺ガ附イテ居ル臺ノ周圍ニ數個ノ孔ヲ穿ケテ飾トシテ居ル、又タ高サ、五寸六分胴徑五寸七分ノ高坏ガアル、此物ハ口邊ニ三線ヲ引キ頸部ニ四個ノ小孔アリ、胴部ニハ楕形ノ模樣ヲ繞ラシテ居リ、下臺部ニモ小孔ヲ繞ラシテイル、而シテ此品ニハ底ガ入レテナク上ヨリ下マデ通リ貫ケデアル製作ハ何レモ精巧デアリ、共ニ祭器ト見ラレル殊ニ後者ノ如キハ決シテ物ヲ容ルベキ器ニアラズ。祭壇ニ供フル爲メニ造ラレシモノデアル。

此ノ海峽ノ邊ハ珍彦ノ釣セシ傳說モアル程ニテ古代彌生式土器ヲ使用セシ民族、乃チ海部族等ガ常ニ往來セシ事ヲ知ル可ク其ノ等民族ノ殘セシ土器ガ多ク發見セラレルノデアル、右等ノ祭器モ古代民族ノ祭祀ニ用ヒシモノヲ海ニ送ラレシト見ル可キデアル。海邊ノ人民ハ近世ニ至ル迄祭祀若クハ祈禱等ノ供物ヲ海ニ沈メル風習ガ殘ツテ居タノデアル。

然シ右ノ土器ハ其年代ノ建國頃ニ近キモノデアリ、又タ祭器デアリ、其製作ノ極メテ珍ラシキモノデアリ、且ツ優良ナル点等ヨリ見テ或ハ　神武天皇ノ御軍備成リ將ニ、浪速ニ進發セラルヽニ際シ此ノ海ノ關門ニ於テ海神ヲ祭リテ、航海ノ安全ヲ祈ラセ賜ヒシ事モアリテ其際御用ヒアリシ祭器ヲ此ノ海中ニ沈メ玉ヒシモノニハアラズヤト思ハルヽノデアル、　天皇ノ御一族ガ海神ヲ崇トビ祭ラレシ事ハ前ニモ述ベテイル。

若シ又タ是等ノ土器ガ　皇師御用ノモノナラズトスルモ海神派ノ民族ガ常ニ此海峽ヲ往來シ此ノ海峽ニ重キ關心ヲ持チ居タリシ事ヲ證スルニハ足ルデアロウ。

小串村ノ西ガ甲浦村ノ大字宮浦デアル、高島ノ前面拾町計リノ距離デ所謂田土ノ浦ノ内デアル或ル人々ハ高島ハ　神武天皇ノ御行宮トシテハ狹イ故ニ此ノ宮浦ニ行宮ヲ置カレシモノナラント云フ者モアルガ吾人ノ見ル處デハ、高島ニ於テ決シテ狹トハ感ジナイガ然シ近距離ノ對岸ナル故ニ兵備ヲ調ヘラル、爲メ一部ニハ此ノ宮ノ浦ノ地モ御使用アリシモノト見テ善シト見ルノデアル。

此ノ宮浦ニ貝殼山ガアル海拔二百九十餘米突デ四邊削ルガ如キ峻嶺デアル、然シ山頂ハ平坦ニシテ其東南角ニ貝塚ガアリ石器ヤ土器ヲ含有スルノデアル。

此處ヨリ發見セシ石鏃、石鏃、石庖刀等ハ製作精巧ノモノ多ク、又タ石冠ヲモ發見セラレテ居ル。土器ハ乃チ彌生式土器ニシテ又タ善キ模樣ヲ付シ製作精巧ノモノガアル、此ノ貝塚ハ現在殘ツテ居ルノハ餘リ大規模デハナイ又タ上層ニハ土師土器ニ近キモノモ少シハ發見セラレテ居リ、又タ貝塚ヨリ大分離レシ西寄リノ山上ヨリハ、祭器ト見ユル土師質ノ「カハラケ」ヲ少シ發見セラレテ居ル、又タ貝塚ヨリ少シク隔リシ所ニ古代ノ竪穴ノ痕跡ガ見ラレル、是等ニヨリテ見レバ此ノ山上ニハ古代彌生式土器ヲ使用スル民族ガ住ンデ居タ事ヲ知ル可キデアル。

凡ソ彌生式土器ハ我縣下ニハ頗ル多ク存在シテ、或ハ平地ニモアリ、又タ斯ノ如ク山上ニモアルガ概シテ平地ニハ土器包含ノ數量多ク山上ニハ數量ガ尠クナイノデアル、之ヲ案ズルニ其頃ハ未ダ統一セル政府ナク、隨所ニ首長アリテ部落間ノ鬪爭モアリシモノナレバ、平地ニ住居スルニハ相當强大ナル勢力ヲ要セシモノデアリ、其ノ勢力弱キモノハ止ヲ得ズ山上要害ノ地ニ居住セシモノト思ハレル。

日本書紀ニモ邃邃之地猶未靡於王澤遙遙使邑有君村有長各自分彊用相凌轢トアルヲ見テモ知ル可キデアル。

此ノ貝殼山ニ居リシ民族ハ其ノ殘存セル石器ノ精巧ナルニ依リ文化ノ程度ハ高カリシモ其勢力ハ弱カリシモノト思ハレル、其年代ヲ案ズルニ我建國ノ一歩手前ヨリ終リハ建國頃ニ及ビシモノト思ハレル、前ニモ云ヘル如ク此ノ彌生式土器使用ノ民族ハ乃チ後ノ海神派ト稱スルモノデアル

神武天皇ノ日向ヲ御出發東向遊バサレシハ瀨戸内海方面ノ海神派ノ民族ヲ賴ミニシテ來ラレシ事ハ明カデアル故ニ、高島ノ宮ヘ御到着遊バサレシ上ハ、是等ノ土民ヲモ懷從遊バサレシ事ヲ知ル可キデアル、此ノ貝殼山ノ民族ノ如キハ文化ノ度高ケレバ

道理ヲ覺ルニ易ク勢力弱ケレバ反抗ノ力ハナイ故ニ、逸早ク　皇師ニ服從シ奉リシモノト見ラレル。

記紀ヲ見ルニ豐ノ國デハ土人宇沙都比古、宇沙都比賣等ガ足一ツ膳ノ宮ヲ作リテ大御饗ヲ献リシトアリ。

日本書紀通譯ニ云フ大和國ニ今、高見山アリ此山ノ麓ハ、乃チ穿村ナリ古ヘ兄滑ノ住セシ跡ナリトテ石窟殘レリ。

又天皇吉野ニ至リマス時ニ人有リ井ノ中ヨリ出タリ光リテ尾アリ　天皇之ヲ問ヒテ曰ク汝ハ何人ゾ對テ曰ク臣ハ是レ國ツ神ナリ名ヲ井光ト爲ス、此則チ吉野ノ首部祖ナリ、更ニ少シク進ム時ニ亦タ尾アリテ磐石ヲ坡イテ出ル者アリ、天皇之ヲ問テ曰ク汝ハ何人ゾ、對テ曰ク臣ハ是レ、磐排別ノ子ナリト此則吉野ノ國樔部ノ始祖ナリトアリ。

又タ大和ニテハ十梟帥ヲ御誅戮ノ後チ「餘黨猶繁、其情則難乃願道臣命ニ勅シテ汝宜大來目部ノ帥大室忍坂ノ邑ニ作盛ニ宴饗ヲ設ケ虜ヲ誘而之ヲ取トノ玉ヲ道臣ノ命是ニ於テ密旨ヲ奉ヒ忍坂ニ堀ヲ我猛羊ヲ選ヒ虜ノ雜居ノ陰ニ之ヲ期シテ曰ク酒酣ノ後ニ吾則チ起ヲ歌ハム汝等歌聲ヲ聞ク則チ一時ニ虜ヲ刺セト已而坐定ノ酒ヲ行フ虜我之陰謀アルヲ知ラズ情ニ任テ徑醉ノ時ニ道臣命乃チ起テ歌ノ時ニ我卒歌ヲ聞テ俱ニ其頭椎ノ劍ヲ拔テ一時ニ虜ヲ殺ス虜復タ噍類者無シトアリ。

又タ大和國平定ノ直後ニ下サレシ詔ニモ、今逆屯蒙ニ屬シ民心朴素、巢棲、穴住、習俗惟常云々トアリ。

是等ヲ以テ見ルモ建國ノ頃ハ、尙ホ穴居ノ風殘リアリシヲ見ル可ク穴居人等ノ、

皇師ニ服從セシモノアルヲ知ル可キデアル。

貝殼山ト高島トハ目睫ノ間ナレバ此山上ノ民族ニシテ　皇師ニ服從シ奉リシ上ハ　天皇時ニ此ノ山上ニ登リ賜ヒシ事モアリシト思ハレル、此山ハ白砂青松樹木少ナク、峻嶮ナルガ山頂ハ風光明媚、畫クガ如ク稀ナル景觀ノ地ニシテ、何人ト雖トモ、一タビ此ノ山上ニ登レバ、其絶景ヲ嘆賞セヌモノハナイ、　天皇一タビ此山上ニ登リ賜ハバ必ズヤ其佳景ヲ嬉ビ玉フ可ク、而シテ要害堅固ノ地ナレバ、時ニ或ハ頂上ヘ御潛留モアラセシ事ト思ハルヽ、表面ノ行宮ハ勿論高島ニ在リ其處ニテ兵備ヲ進メラレツヽアル間ニ、御親カラハ此ノ絶勝要害ノ所ニ安居アラセラルヽ事モ亦タ可ナラズヤト思ハルヽ、

又タ紀ニ到ニ熊野神邑ニ且ハ登ニ天磐盾ニ仍テ引ク軍漸進トアリ。

通證ニ曰ク此ノ新宮ノ浦ニ至リ坐テ神藏山ノ奇シキ磐石ノ景色ノ尋常ナラヌヲ見ソナハシテ、其上ニ登リテ國見ヲモ爲シ玉ヒ且ハサル神々シキ磐盾ナラムカラニハ、其處ニ坐ス國ツ神ナドヲモ祭リ玉フ可キ事ナドアリテ登リ玉ヒシナルベシ、トアリ。

又タ大和御平定後ニ鳥見山ニテ皇祖天神ヲ祭リ玉ヒシ事等ヲ合セ考ヘ見レバ、此山頂ニテ山海ノ形勢ヲ御覽遊ハサレ又タ此ノ明媚淸淨ナル山上ニ於テモ、或ハ天神地祇ヲ祭リ玉ヒシ事モアリシナランカト思ハル、乃チ祭器ト見ル可キ「カハラケ」ノ殘存セルモノアリ又タ此處ニテ石冠ヲ發見セラレシハ或ハ　天皇神祇ヲ祭リ賜ヒシ際ニ御用ヒ遊ハサレシモノナランカト思ハレル。

又タ此山ノ西手ニ今ニ「王ノカクレザト」ト云フ地名殘レリ是レ或ハ　天皇ガ此山ニ御安息アリシ事ニ因メル地名ナラント思ハレル。

又タ宮浦ノ或ル老人ノ話シニ往年其人ガ古キ人ヨリ傳ヘ聞シハ斯ノ貝殼山ノ頂ニハ昔シ殿樣ノ居ラレシニ由リテ貢稅トシテ貝ヲ献上セシモノト云傳フトアリ。

之ヲ要スルニ彼ノ山上ニハ尊キ天皇ノ坐シマスニ依リテ、土民等ガ貝ヲ執リテ御饗ニ献上セシモノカト思ハレル牡蠣ノ如キハ五六寸以上モアル石ニ附着セル儘ヲ持チ上ゲテ居ルノデアル、今我等ハ單身徒手ニテ攀ヂ登ルサヘ困難ナル山上ヘ、石ニ附キタル儘ノ牡蠣ヲ搬ビ上ル如キハ、其勞苦ノ大抵ナラザリシヲ知ル可キデアル、上山ニハ貴キ天ツ日嗣ノ　天皇坐スガ故ニ如何ニモ新鮮ナル貝類ヲ御饗ニ供ス可ク多大ノ困難ニ耐ヘテ、石ニ附タル儘ニ搬ビ上ゲシモノト思ハレル。

又タ此山脈ノ北麓ニ殿山ト云フ所アリ、其處ニモ貝塚アリテ大形ノ石庖刀、彌生式土器等ヲ發見セラレテイル、然シ此處ノ貝塚ハ貝殼山上ノ貝塚ノ末期位ニ屬スルモノデアル之ヲ案ズルニ　神武天皇一時貝殼山ノ嶺ニ御安居アラセシ頃、山上ニ住居セシ土民中ノ一部ノ者等ガ山ヲ降リテ此邊ニ住居セシモノカト思ハレル。

宮浦ト阿津ト村界ノ邊ニ小川ト云フ地名ガアル又タ其邊ニ「カネアゲ」ト云フ地名モアル、案ズルニ此等ハ砂鉄ヲ採取セシ地

名ノ名殘リデアル、貝殼山脈一帶ノ土壤ニハ砂鉄ヲ多ク含ンデ居ルノデアル故ニ、其邊ニハ今モ赤錆ノ水ガ湧出スルノデアル由來吉備地方ハ古來ヨリ至ル所ニ砂鐵ヲ採取シテ居ルノデアル、美作備中等ノ縣北部ハ勿論ノ事、和氣、邑久、赤磐、上道、御津、都窪、吉備、淺口等ノ諸郡ニモ至ル所ニ採鉄ノ遺跡ガアル古歌ニモ

眞金吹く吉備の中山帶にせる細谷川の音のさやけさ

トアル如ク殆ンド吉備國全体ニ亘ツテ採鉄セラレシモノト見ラルノデアル、兒島郡ニモ先年砂鉄ノ研究家伊東忠志氏ガ日比町地内ニテ試ミニ少許採取シテ見ラレシニ頗ル優良質ノ砂鉄ガアリシトノ事デアル。

神武天皇此地ヘ御駐驛ノ砌鉄ノ御用ハ我吉備ノ國ニテハ何處ニテモ供給シ奉リテ餘リアルモノナルガ故ニ吾人ハ必ズシモ、此ノ「コカワ」附近ノ採鐵遺蹟ヲ御行在當時ノ御用ノモノト附會スルモノデハナイガ、唯御手近ノ所ナルガ故ニ或ハ此地ニテモ御採取アラセシモノナランカトモ思ハレルノデアル。

△近頃備後方面ニテ鉄ハ備後地方ニノミ產シ、ソレガ高島行宮遺蹟ノ考察ニ大關係アルガ如ク說ク人アル由ナルガ此等ハ世間ヲ知ラヌ謬見デアル所謂井底ノ痴蛙ナルモノナランカ。

宮津ノ西ヲ大字飽浦ト云フ、飽浦ノ飽ハ乃チ食糧ノ事デアル故ニ此地ハ　神武天皇高島行宮ニ坐マシテ軍備ヲ調ヘラルヽ間ニ兵糧ヲ蓄ヘ置カレシ遺址ト思ハルノデアル。

此邑ニ稻荷神社ガアリ、飽浦稻荷トテ近鄕ニ著名ノモノデアル、此神社ノ緣起ヲ聞クニ此地ニ佐々木氏ノ一族、飽浦氏ガ居城シテ山城ノ稻荷神社ヲ勸請セシモノトノ說モアルガ、夫レトスレバ問題デハナイガ稻荷神ハ神道デハ猿田彦命ヲ祀リシモノ多ク、五穀ノ守護神トシテ崇敬セラルヽノデアル故ニ或ハ　皇師御東征ノ砌彼ノ猿田彦命ノ子孫等ガ隨ヒ來リ、兵糧ノ事ヲ司トリシモノアリテ其人等ガ祖先ヲ祭リ兵食ノ安全ヲ祈リシ事アリテ夫レガ此地ノ稻荷神社ノ起原トナリシモノデハナイカト思ハレルノデアル。

此ノ飽浦ノ小丘上ヨリ天命年間ニ農民彌平ナルモノガ銅鈴三本ヲ發堀シタノデアル。

成田充美ノ編スル備前國古器物圖集ニ、兒島郡飽浦村土中所ニ堀得ル鑄劍得三本、今二本同村藏トアリ。

塚本吉彦翁ノ追記ニ曰クいつの年にやなりけん兒島郡飽浦の民彌平の畑の中より此鋒三本を發堀せり、一本は岡山富家佐々木與惣大夫の懇請により遣わしぬ、殘る二本は飽浦の社家某作州へ持行て低當となしてゐたりしを故ありて我有となし、今その一本は東京帝室博物館へ、又一本は遊就館へ出陳せり云々。

此銅劍壹本ハ今正シク帝室博物館ニアリ銅劍、銅鋒ハ彼ノ銅鐸ト并ビテ古代青銅文化ノ華デアルガ、其形式ニ種々アリ後世ニハ殆ンド儀式用ノモノトナリ、實用ニハ適セヌモノモアルガ、此ノ飽浦發見ノ銅劍ハ正ニ實用ノモノデアリ其年代ヲ案ズルニ建國以後ニハ降ルモノデハナイ。

故ニ此地發見ノ銅劍ハ　皇師ノ內ニテ糧食ヲ司トル人々ガ其祖先ノ遺物ヲ此處ニ納メテ祖先ヲ祭リ兵糧ノ安全ヲ祈リシモノト思ハヽル。

貝殼山ノ西ニ相並ビテ聳ユル嶺ヲ劍山（つるぎ）ト云フ、此ノ劍山ノ脈ノ西北ノ端ニテ彼ノ銅劍ハ發見セラレタノデアル、之ヲ以テ見レバ往昔此地ニ銅劍ヲ埋藏セシ事ヲ傳ヘラレ其ニ因ニテ此ノ一帶ノ山ヲ劍山トハ呼ビシモノナラン。

若シ又タ此ノ銅劍ヲ　皇師ノ人々ノ埋メシモノニアラズトスレバ古代此地ニ青銅文化ヲ持ツ民族ガ住居セシモノト見ル可キデアル。

飽浦ノ西南ニ當リ甲浦村大字郡ノ字陸ノ山中ニモ海祓約百米突計リノ所ニ貝塚ガアル、其所ノ小字ヲ牡蠣捨場ト呼ブノデアルガ其名ノ如ク此貝塚ノ層ハ牡蠣ノ殼ガ大部分デアル、其內ニ彌生式土器ヲ含有シテ居ル、此處ノ土器ニモ精巧ノ模樣アルモノガアル現存スル規模ハ餘リ廣クハナイ樣デアルガ此ノ所ニモ古代海神派ノ民族ガ住居セシ事ヲ知ル可キデアル。

此ノ郡ノ沖合ニ辨才天ト稱スル小島ガアル、其處ニ辨才天ノ小祠アリテ之レヲ宗形ノ神ト稱セラレテ居ル宗形ノ神ハ海部民族ノ奉祀スル神デアル故ニ、此邊ニ海神派ノ民族ガ分布シアリシ事ヲ知ル可キモノデアロウ。

以上叙述スル所ヲ收納スレバ東ハ邑久郡大宮村ニ阿仁神社、銅鐸、貝塚アリ其次ニ幸島村ニ龜石アリ其次兒島灣口ニ彌生式土

器アリ其次兒島郡小串村阿津ニ竹島神社ノ關係地アリ、其西甲浦村宮浦ニ砂鐵ノ遺跡、殿山貝塚、貝殼山貝塚及ビ尼塚アリ、其西ノ飽浦ニ銅劍ノ發見地アリ、其西南郡ニ貝塚及ビ宗形神ノ祠アリ、乃チ田土ノ浦ヲ中ニシテ東西數里ニ亘リテ古代ノ遺跡ガ連綿トシテ居ルノデアル、然カモ其兩方面ニ各青銅文化ノ遺跡ガアル、是等一帶ノ地ガ如何ニ古代ノ遺跡ニ富メルカヲ見ル可ク乃チ此邊一帶ニ所謂海神派ノ民族ガ蕃殖シアリシヲ知ル可キデアル。

神武天皇ニハ此ノ海神派トハ姻戚ノ御關係ニアルヲ以テ此等海神派ノ蕃殖セル地ニ行宮ヲ置カレ、此等ノ土民ヲ懷柔セラレシモノナル可ク是等ノ土民モ亦タ　天皇ニ親ミ深ク心ヨリ御一行ヲ歡迎セシモノナル可シ　皇師此地ニ在リテ是等ノ民族ヲ使役セラルヽアラバ、兵備ノ御完成ニ遺憾ナカリシモノデアロウ。

仁德記ニ大后將ニ豐樂ニ而於ル採ニ御綱柏ニ幸ニ行木國ニ之間　天皇婚ニ八田若郎女ニ於レ是大后御綱柏、積ニ盈御船ニ還幸之時所レ驅ニ使於水取司ニ吉備國兒島之仕丁、是退ニ已國ニ於ニ難波之大渡ニ遇ニ所レ後倉人女之船ニトアリ。

欽明紀ニ十七年遣ニ蘇我大臣稻目宿禰等ニ於備前兒島郡置ニ屯倉ニ以ニ葛木山田直瑞子ニ爲ニ田令トアリ、敏達紀ニ十二年　天皇遣ニ吉備海羽島ニ召ニ日羅於百濟ニ百濟國主怖ニ畏天朝ニ不レ敢ニ違勅ニ奉レ遣ニ以羅并恩率德爾及參官柁師水手等若干人ニ日羅等行ニ到吉備兒島屯倉ニ朝廷遣ニ大伴糖中連ニ而慰勞爲復遣ニ大夫等ニ於難波館訪ニ日羅ニトアリ。

是ヲ以テ見レバ當時此ノ屯倉ハ瀨戸內海ノ要衝ニアリ、國際的ノ一大亭館ナリシ事ヲ知ル可シ、乃チ兒島郡東部ガ古代人員物資ノ豐富ナリシ事ヲ知ル可キデアル　神武天皇御東征ノ頃モ此ノ高島附近ノ兒島郡東部ニ於テ物資ノ不足ナカリシ事ヲ知ル可キデアル。

此ノ東兒島ハ甲浦村ニ海拔四百二十米突ノ金甲山ガアル、此山ハ一ニ、高ノ嶺（こうのみね）又ハ神ノ峯（かみのみね）トモ呼ハレ山麓ニ兒島ノ國魂ナル建日方別命ヲ祀ツテアル、此祠ハ元トハ金甲山上ニアリシトノ事ナリ、此ノ金甲山ヨリ山脈ガ東北ニ走リ、高山、劍山、貝殼山等ノ峻峯ガ連ナリ、白砂青松地ハ美クシク風光明媚ナル故ニ登山家ナドモ屢々來遊スルノデアル、其等ノ人ノ間ニハ此ノ一帶ノ山脈ヲ兒島「アルプス」トモ呼ンデ居ル。

吾人案ズルニ此ノ東兒島ノ高山脈一帶ノ邊ヲ元トハ高島ト汎稱シテ居タモノカト思ハレル後世、郡、北浦、飽浦、宮浦、阿津小串ト各邑名ガ出來シ爲メ本來ノ汎稱ハ遂ニ沖ノ小島ニノミ殘リシニハアラザルカ、是レハ吾人ノ單ナル空想ノミデハナク、世間ニ類例モアル彼ノ陸奧國ハ元來、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奧ノ五州ニ亘レル汎稱ナリシモ、後ニハ唯其北端ニノミ元名ガ殘ツテ居ル、其他鄕名等ニモ往々此例ハアル近頃河本一夫氏等ノ說ハ高島行宮ハ廣ク吉備國一帶ノ海岸ヲ指シテ稱スベキモノデハナイカト云フノデアル、斯ノ如キ廣キ角度ヨリ見レバ東兒島一帶ノ地ガ元來ノ高島デ乃チ之ヲ汎高島トデモ見做ス可キモノデハアルマイカ。

（四）地勢風土ノ駁論ニ就テ

他ノ傳說地ヲ主張スル論者ノ中ニハ此ノ高島ノ邊ハ山脈ノ北陰ニアリテ、寒風吹キ行宮ノ位置ニ適セズト云フ事アルガ是ニ就テ少シク辨明シテ置ク。

山ノ北面ニシテ寒風ノ吹クト云フ事ハ相對的ニ見ラレルノデ山ノ東南面ヨリハ寒イニハ違イナイ、然シ瀨戸內海方面ハ寒キ所タリトモ山陰道、北陸道ノ如ク嚴シクハナイ、元來ガ我國デ中和ヲ得テ居ル地方デアル故ニ、寒風來ルトモ耐ヘ難キ程デハナイ、又タ此邊ハ降雪ハ少クナイ土地デアル、彼ノ神樂歌ノ冬ノ部ニ霰ト霜トヲ歌ツテ、雪ノ語ガナイノヲ見テモ知レルデアロウ又之ヲ實際ニ徵スルニ山ノ北陰ト云フ事ヲ現代人ガ論ズル程ニ古代ハ忌ミ嫌ツテハ居ナカツタ事ガ知レルノデアル、乃チ之レヲ古代人ノ住居ノ遺跡タル貝塚及ビ土器ノ窯地等ニ就テ見ルニ、

前ニ記セシ邑久郡大宮村藤井ノ貝塚ハ山脈ノ北麓ニアリ

其東ナル同郡豐原村大橋ノ貝塚モ山脈ノ北麓ニアリ

其東ナル同郡本莊村佐井田ノ貝塚ハ山ノ西側ニアリ

其先ナル同郡邑久村山手ノ貝塚ハ北ヨリ南ヘ突出セル山ノ西麓ニアリ

同郡牛窓町ノ前島、同町ノ字、師樂、同郡長濱村字奥浦等ノ窯地ハ山ノ北ニ在リ
又先ニ述ベシ兒島郡甲浦村大字宮浦字殿山ノ貝塚、同村大字郡字陸ノ貝塚モ山ノ北面ニアリ
同郡灘崎大字彦崎ノ貝塚ハ山ノ北麓ニアリ
同郡鄕内村字熊迫ノ窯地ハ山ノ北面ニアリ
同郡粒江村ノ字船津原、磯ノ森、船元ノ三貝塚モ山ノ西又ハ北ニアリ
同郡下津井町六口島ニハ山ノ北手ニ大首ノ窯地、ト柳ノ谷ノ貝塚ト窯地トアリ
其東ニテ香川縣所屬ノ櫃石島ニハ山ノ東ト北ト西トニ窯地アリ
其東ナル下津井郡附屬ノ釜島ニハ山ノ北陰ニ窯地アリ
都窪郡吉備町字關戸及ビ大内ニハ共ニ山ノ北麓ニ貝塚アリ
斯ノ如ク古代民族ノ遺跡ハ山ノ北又ハ西ニ多ク存シテ居ル勿論山ノ東又ハ南ニモ存スルノデアルガ其ノ北又ハ西ニアル遺跡モ
劃合ニ少ナクハナイノデアル是ヲ以テ見ルモ古代ノ人民ハ現代人ノ說クガ如クニ山北又ハ山西ヲ忌避シテ居ナカツタ事ヲ知ル
可キデアル。
又タ奈良朝頃ノ宮道乃チ山陽道ノ道筋ヲ調ベテ見ルト此地方ニテハ割合ニ山ノ北陰ヲ多ク通ツテイルノデアル。
乃チ和氣郡ノ三石ヨリ西ニ進ミ藤野村本莊村ノ邊ハ南ノ山脈ノ北麓ヲ通ツテ居ル。
吉井川ヲ渡リテ赤磐郡ニ入リ可眞村邊モ亦タ南ノ山ノ北麓ヲ通ツテイル。
其ヨリ西ニ行キ穗崎ノ邊モ山ノ北麓ヲ通ツテイル。
朝日川ヲ渡リテ御津郡ニ入リ横井村ノ邊モ牛田山ノ北麓ヲ通リ笹ケ瀨ヲ越ヘテ富原ノ邊モ山ノ北麓ヲ通ツテイル。
又タ備前一宮ヨリ備中宮内ヘ行ク間モ元トハ吉備中山ノ北麓ヲ通ツテイル。
板倉ヨリ矢部迄ハ平野デアルガ矢部ノ峠ヲ越ヘショリ加茂村ノ千足、山手村ノ邊モ亦タ日差山ノ北麓ヲ通ツテイルノデアル。

斯ノ如ク古代ノ官道ハ不思議ニ山ノ北麓ヲ多ク通ジテ居ルノデアル吾人ハ何故ニ斯クアル哉ヲ知ラナイガ唯古代人ハ山ノ北陰
ヲ餘リ嫌ツテハ居ナカツタト云フ事ヲ知ル可キデアロウ。
尙ホ高島ノ前面ナル飽浦、宮浦、阿津ノ村落モ古クヨリ今ニ至ル迄連續シテ繁昌シテ居ルノデアル其内ノ宮浦ハ石工、建築業
者等多ク他地方ヘ出稼シテ數十百万ノ富ヲ積ミテ歸來スルモノ往々アリ、巨萬ノ富ヲ擁スレバ何地ニテモ山東山南ノ溫暖地ヲ
撰ミ住居シテ可ナルモノナルニ唯鄕里タルノ故ヲ以テ此ノ山ノ北陰ニ歸リ其處ニ宏大ノ邸宅ヲ構ヘテ安居シテイルノデアル是
等ヲ以テ見ルモ一部論者ノ說ク如ク人必ズシモ實際ニ山ノ北陰ヲ忌避スルモノニモアラザル樣デアル。
又タ此地方ノ風位ヲ考フルニ每年數度ノ暴風ハ殆ンド東南ノ風デアル故ニ山ノ東面若クハ南面ニナル人家田園等ハ被害甚大デ
アル、實際一昨年ノ暴風ニ徵スルモ、和氣郡上道郡等ノ山ノ東南面ノ地ハ被害夥シアリシガ之ニ反シテ此ノ高島ノ前面ナル山
脈ノ北陰地帶等ハ損害微小ナリシモノデアル。
又タ此高島ハ海中ノ孤島ナルガ故ニ風波激シク行宮ヲ置カル、ニ適セズト云フ人アルモ是レ亦タ實際ヲ知ラザル言デアル此高
島ハ地勢南北ニ長キ山脈ナルガ故ニ若シ東南ノ暴風起ラントセバ舟ヲ島ノ西陰ニ繫留スレバ安全デアル又タ西北ノ强風來ラン
トスレバ舟ヲ東又ハ南面ニ碇泊シテ無事ナルモノデアル此事タル決シテ吾人ノ空言ニハアラズ現ニ此邊ノ漁舟商船皆斯クシテ
風波ヲ避ケテ居ルノデアル。
前ニモ述ベシ如ク高島神社ハ南ノ低地ニテ磯邊近クニアルニモ關ハラズ如何ナル暴風怒濤起ルトモ嘗テ波浪ノ社殿近クニ達セ
シ事ナキヲ以テ見ルモ此島ノ安全ナル事ヲ知ル可キデアロウ。
又タ此島ガ行宮ヲ造營セラルヽニハ狹小ナリトノ說アルモ是レ亦タ實地ヲ知ラザル言デアル此島ハ今ハ岡山市ノ管理ニ屬シ開
拓シテ遊園地トナリ櫻ヲ多ク植ヘラレシガ善ク成長シ每年花期ニハ爛漫トシテ海水ニ映シ所謂水晶宮トモ評ス可キモノガアリ
海中ノ花園トシテ類ヒ稀ナリ爲メニ老若男女幾百トナク來リ遊ブモ敢テ狹隘ヲ感セス又時トシテハ數百千人ノ運動會ヲ催ス事
モアリ、又タ夏季ニハ海水浴場ノ設ケアリテ日ニ數百ノ男女ガ海岸ニ嬉遊スルニ餘リアリ又タ時ニハ工兵隊ノ演習本據ニ宛テ

ラル、事アリ一百二百ノ鐵舟ハ島ノ一部分ニ繫ギテ事足ルノデアル。

又タ平賀元義ノ歌ニ

和たつみ乃潮乃八百重の八潮路湯吹くな風は涼し九有けり

ト云フノガアル又タ

白とりの鷺乃やし路の櫻花し路たへに社咲にほひたれ

ト云フノガアル江戸期ニ於テハ此島ニ竹林生茂リ白鷺ノ群棲シテ居タモノデアルガ其頃ニモ社殿ノ邊ニハ櫻花ノ咲ケルモノアリシト思ハレル今尚ホ神社ノ傍ニハ那木ノ大木其他種々ノ神木繁リテ神々シキ極ミデアル。

田村剛博士ハ此島ハ風景頗ル善キヲ以テ國立公園ニ入レタイノデアルガ地理上ノ關係デ入レラレヌノハ甚ダ遺憾ノ事デアルト云ハレテ居ル。

是等ヲ以テ見ルモ此島ガ　高島行宮ノ御聖蹟トシテ或ハ狹小ナリトカ或ハ不適當ナリトカ云フ說ノ取ルニ足ラザル事ヲ知ル可キデアロウ。

(五)　出雲民族ニ就テ

鄉土史家ノ間ニハ往々出雲民族ト云フ事ヲ說ク人ガアル其等ノ說ニヨレバ是レハ大巳貴命ノ子孫ニシテ出雲ニ蕃殖シテ居リ其勢力ガ或ハ吉備地方ヘモ及ヒ居タリシ樣ニモ云ヒ。

神武天皇ノ御東征ニ際シテ或ハ此ノ民族ト交陟アリシトカ或ハ此等ノ民族ヲ牽制アラセラルヽ必要アリシトカ云フヲ聞ク事アルモ是レハ大ナル謬見デアル。

吾人ノ見ル所ニテハ出雲民族ナルモノハ左樣强大ノ勢力アリシモノニハアラズ　神武天皇御東征ノ頃ニ其等ノ民族ガ果シテ出雲地方ニ蟠居シアリシ哉否哉ヲ疑ハレルノデアル。

日本書紀ヲ見ルニ庚申年秋八月癸丑朔戊辰　天皇當レ立二正妃一改廣求二華胄一時有レ人奏レ之曰事代主神共二三島溝樴耳神之女玉櫛媛一所レ生兒號曰二媛蹈鞴五十鈴姬命一是國色之秀者　天皇悅レ之九月壬午朔乙巳納二媛蹈鞴五十鈴姬命一以爲二正妃一アリ。

日本書紀通譯ニ曰ク一書ニ云フ事代主神化爲二八尋熊鰐一通二三島溝樴姬一而生兒、姬蹈鞴五十鈴姬命云々トアリ。

大三輪ノ神鎭座次第ニ云フ事代主神化爲二八尋熊鰐一通二三島溝樴耳小女玉櫛媛一云々トアリ。

此等ヲ合セテ考フルニ三島ノ溝樴耳ハ父ノ名ニテ（大倭神社ノ注進狀ニ攝津國三島之人トアリ）其女溝樴姬、又ノ名ハ玉櫛姬トモ云ヒシナリ。

但シ古事記ニハ事代主神ヲ大物主ノ神ノ事トシ神代紀ニモ記ト同ジク大三輪神トシテ事代主神ノ方ヲバ又云フトシテ擧ゲテイル。

サテ事代主神ト申スハ古事記傳ニモ云ヒタル如ク顯御身ノ神ニハアラズ此神ノ鎭座ノ社ノ御靈ヲ云ナレバ神名帳ニ大和國葛上郡鴨都波八重事代主命カ又ハ高市郡高市御縣坐、鴨事代主神カ此二社ノ内ノ御靈ナルベシ飛鳥ノ神社モ同神ナレドモ事代主ト申ス社號ノ方ナル可シ。

大意ニ云フ三島溝樴耳命ニ、大女、小女、二柱オハシケル中ニ、大女ヲ蹈鞴媛ト申ス即チ古事記ニ所謂、勢夜陀多良比賣、是也、大物主神ノ御妻トナリテ生坐ルガ即チ姬蹈鞴五十鈴姬命ニマス、又其小女玉櫛媛命、事代主命ノ御妻トナリテ生坐ハ御子五十鈴依姬命ニ坐セイ、サテ此姬蹈鞴五十鈴姬命ノ生出坐セル事件ハ名義蹈鞴ハ記ニヨルト御母ノ御名勢夜陀多良比賣ニヨレルモノナリ、記傳ニ曰ク勢夜ハ地名ナルベシ聖德太子傳曆ニ勢夜ノ里ト云フカ見ヘテ今大和國平群郡ニ勢夜村アリ。

以上諸書ニ依リテ見ルモ出雲民族ノ祖神ト云ハルヽ大物主神、及ビ事代主命ハ神話ノ神ニシテ實在ノ神デハナイノデアル事代主神トハ大和ノ鴨都波八重事代主命ノ神社カ又ハ高市郡ノ鴨事代主神社カノ御靈カトアリ決シテ出雲ノ國ニハ關係ナキモノデ

アル。

又タ皇后姫蹈鞴五十鈴姫命ノ御誕生地ハ攝津ノ三島ト見ラレ是レ亦タ出雲トノ關係ハナイ、此ノ御結婚ノ御儀ハ鄕土史家等ガ以テ大和朝廷ト出雲民族トノ融和ガ成立セシモノト云フ事モアルハ夫レハ暫ク其人等ノ意ニ任シテ置ノトスルモ所謂出雲民族ノ中心ヲナス主要人物ガ何レモ畿内邊ニ在リテ出雲方面ニ居ナイ事ガ知レレバ建國頃ニ於テハ出雲地方ニハ或ハ其一派ニ屬スル少數ノ下民共ハ住シテ居タカモ知レナイガ餘リ大シタルモノニテハナカリシモノト思ハレル。

崇神天皇ノ御代ニ出雲派ノ一族ガ其ノ祖神ヲ奉祀セン事ヲ願ヒ　天皇之ヲ御許シニナリ爰ニ初メテ出雲大社ヲ創建シタモノデアルガ元來此民族ノ傳說ハ紀伊ノ國ト出雲國トニアリテ何レヘ社殿ヲ建ツ可キカニ就テ種々詮議セラレシガ遂ニ何等カノ都合ヲ以テ出雲ニ創建セラレシモノデアル。

吾人ハ此際ニ紀伊ヲ捨テ、出雲ニ建立セシ理由ヲ知ラナイガ吾人ノ見ル所ヲ以テスレバ其地理等ヨリシテ寧ロ紀伊ニ創建スルヲ正シトス可キデハアラザリシカト思ハレル然ルニ遂ニ出雲ヲ撰ミタル事ニ就テ又吾人ノ憶測ヲ云ハシムレバ紀伊ニ於テハ大和朝廷トノ距離近ク朝廷ノ勢力隆盛ナレバ終始其下ニ屈服シテ居ナケネバナラヌガ出雲ハ大和ヨリ遠ケレバ朝廷ノ勢力モ稍ヤ薄キヲ感ス可ク其地方ニ於テ社殿ヲ造リ一族ノ繁榮スルアラバ敢テ朝廷ニ離反セズトモ地方ニ自己ノ勢力ヲ張リ得ルナラントノ事ガ其目的タリシモノカト思ハレル、事實此ノ冀圖ハ成功シテイル山陰地方ニ於テハ出雲族ノ宗家ヲ國造家ト稱シテ生神ノ如ク之レヲ尊敬シ國守以上ニ優待シテ居タノデアル。

要スルニ出雲民族ノ神話傳說ガ出雲國ニ當テ拵メテ構成セラレアルノハ大社ヲ出雲ニ創建セシヨリ以後ニ於テ作爲セラレシモノデアロウ。

又タ鄕土史家等ガ出雲民族ノ勢力ヲ過大視スル原因ハ美作又ハ備中北部ニ出雲系ノ神社ガ多クアルガ故ニ古代出雲民族ガ此地方ニマデ勢力ヲ及ボシ居タリト見ルノデアルガ是レモ全ク謬見デアル。

余ハ先年美作地方ヲ踏査シテ各所ニ或ハ國主神社又ハ國司神社ト云フモノアリテ其ノ御祭神ハ大概大國主命ト稱シテ居ル事ヲ知レリ然レドモ吾人ガ實地ニ就テ見ル所ニテハ古代ノ遺跡トシテハ縣南部ト同ジキ彌生式土器系ノモノ幾分アリ又タ國栖ノ遺跡モ多クアル此ノ國栖族ハ古書ニモ見ル如ク多クハ穴居セシモノニテ又タ土蜘蛛トモ呼ハレテイル而シテ出雲民族ノ遺跡トシテハ何等見ル所ナカリキ。

此ノ國栖族ノ祖神ヲ祀リシモノガ乃チ國栖神社デアリ之レガ轉訛シテ或ハ國主神社トナリ又ハ國司神社トナリシモノデアロウ

苫田郡富村ニハ訓正シク楠ト云フ部落ガアリ楠神社ガアル。

是等ノ國主神社又ハ國司神社ハ其御祭神ガ詳ナラヌ故ニ後世出雲國造家ノ巡教セラルヽ際ナドニ此ノ祭神ヲ問フアラバ彼等ハ必ズ之ヲ大巳貴命ト指定シタモノデアロウ、美作及ビ備中北部等ニハ近年迄出雲國造家ノ巡教セラルヽアリテ之ヲ優待セシ事ハ國守以上ナリシモノデアル。

是等ノ事情ヲ考ヘ見レバ縣北部ノ諸社ノ御祭神ヲ決定セラレシハ大概奈良朝期、平安朝期若クハ其以後ノ事ニ屬スルモノデアロウ此頃ニ於テ出雲教ナルモノハ廣ク中國地方ニ宣布セラレシモノデアル。是レ乃チ出雲民族ノ理想ガ成功セシモノト云フ可キデアロウ。

此ノ御祭神ノ指定ハ敢テ國主神社及ビ國司神社ノミニ限ラズ祭神詳ナラヌモノヲ國造家ニ問フアラバ必ズヤ出雲系ノ神ニ指定セラレシ事ハ想像ニ難クナイ所デアル尙ホ中世期ニ於テ出雲教ノ信仰盛ンナルニ及ビテハ又多ク出雲系ノ神社ヲ勸請セラレシモノデアロウ。

彼ノ鄕土史家等ハ這般ノ事情ヲ究メズ唯出雲系ノ御祭神多キヲ見テ以テ古代此地方ニ出雲民族ノ勢力波及シアリシモノト思フノハ笑止ノ事デアル。

仮リニ建國頃ニ出雲民族ノ一部ガ出雲ニ住居セントスルモ其勢力ハ微々タルモノニシテ到底中國脊梁山脈ヲ越ヘテ山陽方面ヘ手足ヲ展ハシ得可キモノニハアラズ、又仮リニ大讓歩シテ出雲民族ガ强大ナリシトセンカ之レニ對シテ交通ノ衝ニ當ルトカ或ハ交媾ニ便ナル地点等ニ行宮ヲ置カル可キモノニハアラズ必ズヤ陸地ヲ離レシ海中ノ島乃チ兒島ノ如キ地ニ據ラルヽガ尤モ安

全ナルモノデアル何レニスルモ高島行宮ノ聖蹟ヲ考査スル上ニ出雲民族ヲ云々スルハ無益ノ業デアル。

記紀ヲ見ルモ其他ノ古史ヲ見ルモ　神武天皇御東征ノ途ニ出雲民族トノ交渉ヲ傳ヘシモノハ一モ見當ラナイノデアル是レハ唯現代ノ鄕土史家ノ徒ガ憶說ニ過ギヌモノデアル。

(六)　高島行宮ノ年數ニ就テ

神武天皇吉備高島ノ宮ニ坐マセシ年數ニ就テ古事記ニハ八年トアリ日本書紀ニハ三年トアル此ノ差違ニ就テハ未ダ何人モ考究セシ事ヲ聞カヌノデアルガ吾人ハ今爰ニ高島宮ノ位置ヲ考定セシニ付テハ此ノ年數ノ差違ヲ考究スル事モ亦タ吾等鄕土人ノ責務カト思フノデアル。

先ツ古事記ノ八年トアルヲ考フルニ是レハ成數ノ八ニハアラズシテ彌年ト云フ意味デアル彌年トハ乃チ多年ノ意デアルツマリ多クノ年間坐マセシト云フ事デアル。

凡ソ吾日本人ハ古ヨリ今ニ至ルマデ多キコトヲ形容シ彌テト云ヒ八ト云フノデアル例ヘバ大八島國ト云ヒ、八咫ノ御鏡ト云ヒ八雲立、八重垣、八尋殿、八尋鰐、八重ノ潮路、八岐大蛇等ノ語ハ皆多キヲ形容セシモノデアル尙之ヲ一層多シテハ八十平瓮、八十梟師等ノ語アリ國引ニ八十綱ノ語アリ三韓ノ朝貢ニ八十艘ノ語モアル尙ホ嘘八百トカ八百比丘尼トカ八百屋店等ノ語モアリ八千代トカ吐鵬ノ八チ八聲ノ歌志モアリ八百萬神ノ稱モアル。

人類ノ未ダ無智蒙昧ナリシ頃ハ數ヲ算ヘル事ガ尤モ難カリシモノデアル智識ノ進ムニ從ツテ次第ニ多クノ數ヲ算ヘ得ル樣ニナルノデアル之レハ幼兒ノ發育ヲ見テモ知レルデアロウ劣等ノ野蠻人ハ大抵五ツ迄數ヘ得テソレ以上ハ澤山ト云フ事デ濟マシテ居ルノデアル。之レハ人類ノ手ノ指ガ五本アル故ニ之レヲ折リ數ヘテ五ツ迄ハ算ヘ得ルノデアル最下等ノ野蠻人ニハ三ツ迄シカ數ヘ得ヌモノモアリシトノ事デアル。

我日本人ノ祖先ハ七ツ迄算ヘ得タノデアル故ニ八以上ハ澤山ト云フテ濟マシテ居タノデアル。是レガ後世迄習慣ニ殘ツテ八ヲ

彌トシ澤山ノ數ヲ形容スル事ニナリシモノデアル。

漢人ノ祖先ハ八ツ迄數ヘ得タノデ九以上ヲ澤山ト形容シテ居ルノデアル乃チ、九州トカ九鼎トカ九年ノ洪水トカ、多ク集マル鳥ヲ鳩ト云フ如キデアル。

之レヲ以テ見レバ古事記ノ八年トアルハ彌年ノ事ニシテ乃チ多年ノ意味タルヲ知ル可キデアロウ。

又タ日木書紀ノ三年ト云フノモ正數ノ三デハナク同晉ノ算年ノ意デアル乃チ何程カノ年ヲ數ヘル間、坐マセシト云フ事デアル乃チ算年トハ數年ト云フ意味ニナルノデアル。

是レヲ以テ見レバ一方ノ八年ハ彌年ニシテ多年ノ事デアリ他ノ一方ノ三年ハ算年ニシテ數年ノ事デアル故ニ乃チ多年ト數年トノ義ニシテ餘リ差違アルモノデモナク之レヲ合セテ多數トスレバ一ツノ熟語ニナル程ノモノデアル乃チ何年間カ可ナリ多數ノ年月ノ間此ノ高島ノ宮ニ坐マセシ事ト解釋ス可キモノデアロウ。

但シ或ル鄕土史家ガ　神武天皇高島ノ宮ニ坐マセシハ數代ノ久シキニ亘ルモノト云ヒシ事アルノハ無論取ルニ足ラヌ妄說デアル。

○附記　此ノ研究ハ未ダ完成セシモノニハアラズ。今後モ尙ホ得ルアレバ隨ツテ追補セル所アル可シ。

昭和十四年七月六日稿

395
536

昭和十四年八月二十五日印刷
昭和十四年九月　五　日發行

岡山縣御津郡一宮村大字西辛川四西ノ四
編輯兼發行者　水原岩太郎

岡山市津島二四六
印刷者　近藤勇

岡山市津島二四一
印刷所　邦美堂印刷所

發行所　兒島郡甲浦村役場

終